

# 「資質・能力の構造化」等について



## 1. 外国語を学ぶ意義

- AI時代に外国語を学ぶ意義の再定義と、外国語の「見方・考え方」の見直し

## 2. 目標・内容の一層の構造化

- 「学びに向かう力・人間性等」の整理等を踏まえた目標の示し方
- 「高次の資質・能力」（「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」）を中心とした内容の一層の構造化

## 3. 発信力強化

### (1) グローバル・多文化共生社会の担い手の育成 (外国語で他者とコミュニケーションを図る意欲等の育成)

- 英語を学ぶ動機付けや児童生徒の目標設定の在り方
- 動機付けを強化するための話題・活動の在り方

### (2) 英語の使い手の育成（英語運用能力の育成）

- 校種間接続の課題等を踏まえた指導内容（話題・活動等）の段階的な示し方
- 5領域の活動を通じた知識及び技能の指導の在り方（語彙や文法の指導を含む）
- 科学的知見を踏まえた学習プロセスを意識した指導の在り方
- 高等学校の科目（特に「論理・表現」）の在り方
- AIを含むデジタル学習基盤の活用の在り方

## 4. 児童生徒の英語力の把握・評価

- 「学びに向かう力・人間性等」の評価の新しい整理を踏まえた評価等の在り方

## 5. 柔軟な教育課程

- 義務教育における調整授業時数制度や高校における科目の柔軟な組み替えや履修の免除を可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方

## 6. 指導体制・環境整備等

- AI時代の教師・ALT等の役割の再定義
- 教員の資質（英語力・授業力）向上のための方策と、ALT等との連携の在り方
- 外国語を使う機会の充実の在り方

## 7. 英語運用能力に関する社会全体の課題

- 英語運用能力に関する社会全体の課題と、学校教育において取りうる対応の方向性

## 8. 英語以外の外国語

- 英語以外の外国語の推進方策



# 「資質・能力の構造化」について

## 【現状と課題】

### 教育企画特別部会における議論

- 教育企画特別部会において「資質・能力の構造化の状況を踏まえた更なる検討の方向性」として示された事項のうち、特に以下の点については、第6回外国語WGでの意見と併せ、検討が必要と考えられる
- 学習指導要領の記述が、教師にとって分かりやすく、学校を通じて保護者や地域住民等に伝えやすいものであるという視点から見れば、整理されている「見方・考え方」や「高次の資質・能力」の中には依然として記載が冗長であったり、理解が難しい用語を用いて表現されているものも散見されるため、一層分かりやすくシンプルに示すことが可能かどうか、引き続き各WGで検討してはどうか
- 「思考力・判断力・表現力等」については、これまでに習得した知識や技能を活用して、実社会・実生活などの場面を想定した課題解決に近い形で資質・能力を発揮するという性質の柱であり、「知識及び技能」とりわけ技能との適切な整理が必要

※ なお、上記「資質・能力の構造化の状況を踏まえた更なる検討の方向性」で示された事項のうち、「高次の資質・能力を踏まえた個別の資質・能力の精査」や「趣旨を実現するための教科書の在り方の検討」については、児童生徒がコミュニケーションにおいて使用頻度の高い重要な語彙や文法等を繰り返し扱うことで、それらを着実に身につけ、使うことができるようにする観点から、語彙リストの作成やそれに伴う語彙数の精選、中学校で指導すべき文法事項の焦点化、中学校の話題の見直し等、関連する事項が検討されてきたところ引き続き議論が必要な事項がないか、検討が必要

## 【方向性と具体的論点（案）】

### 検討の方向性

- 現在の「見方・考え方」の案は、他教科と比較して記載が冗長となっているため、わかりやすく簡潔に示すべきではないか
- その際、「見方」に示されている要素は、外国語を学ぶ本質的意義（言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと）を具体化している部分であり、目標や高次の資質・能力への位置づけとの重複もないことから、原案を維持し、「考え方」を簡潔に示すべきではないか

【案1】「考え方」に示されている受容と発信の要素は、高次の資質・能力や目標の学びに向かう力、人間性等においても位置づけられており、より簡潔に示すことが可能ではないか

(案) 外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、(見方)  
他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること (考え方)

【案2】「考え方」に示されている「多様な他者との相互理解を図ること」は、外国語を学ぶ本質的意義を具体化している一方で、「考え方」としては抽象度が高いことから、受容と発信の要素を残すべきではないか

(案) 外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、(見方)  
多様な他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信すること  
多様な他者との相互理解を図ること (考え方)

【案3】「考え方」に示されている受容と発信の要素及び多様な他者との相互理解をより簡潔に示すことが可能ではないか。「表現等を工夫して」は、「多様な他者」とすることでその趣旨を表せるのではないか。

(案) 外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、(見方)  
多様な他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自らの考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること (考え方)

- 上記と併せ、目標や高次の資質能力についても、一層分かりやすく簡潔に示すよう検討すべきではないか

※「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」の整理については、評価の在り方と併せて別途議論。



# 資質・能力の構造化の状況を踏まえた更なる検討の方向性（案）

- 各WGにおける資質・能力の構造化の検討状況を一覧化し、本部会の論点整理で示した資質・能力の構造化の趣旨や、総則・評価特別部会で整理したチェックポイント等を踏まえ検討したところ、以下1～7については共通して精査を要するのではないかと
- ✓ これら以外に、各WGに対して個別に指摘すべき事項や、各WG共通で検討を要する事項はないか
- ✓ 本日の議論を踏まえて、引き続き総則・評価特別部会や各WGにおいて資質・能力の構造化の具体についてさらに検討を深めることとしてはどうか

## 1. 資質・能力の深まりの可視化

- 今般の構造化を通じ、「深い学び」が実現したイメージを教師が具体的に持つことができるようにすることが重要。（【資料1】P6 総則・評価特別部会「チェックポイント」B関連）
- こうした視点で見た際に、抽出された「高次の資質・能力」のうち特に「統合的な理解」については、依然として個別の知識及び技能が不足なく身に付いた状態を「要約」して示すに留まっているものも見られる。
- 個々の知識・技能が単に網羅されているかではなく、「指導を通じて学びが深まったときの児童生徒の姿をイメージできるような示しているか」といった観点から、各WGで記載を見直し、個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、「統合的な理解」となった児童・生徒の姿を描き出せるよう更に検討すべきではないか。

## 2. 分かりやすさ、シンプルさの一層の追究

- 「深い学び」を実現する具体的なイメージを持つことができるようにするためには、学習指導要領の記述が、教師にとって分かりやすく、学校を通じて保護者や地域住民等に伝えやすいものであることも重要。（【資料1】P6 総則・評価特別部会「チェックポイント」D関連）
- こうした視点で見た際に、整理されている「見方・考え方」や「高次の資質・能力」の中には依然として記載が冗長であったり、理解が難しい用語を用いて表現されているものも散見される。
- 各教科等の本質や育みたい資質・能力を十分に表現可能な範囲において、解説との役割分担も含め（教科等の本質的な意義に焦点化できているかという視点から精査）、一層分かりやすくシンプルに示すことが可能かどうか、引き続き各WGで検討してはどうか。

## 3. 「高次の資質・能力」を踏まえた個別の資質・能力の精査

- 総則・評価特別部会においては、「高次の資質・能力」の全体を暫定的に整理した後、それらを基に各教科等WGにおいて個別の資質・能力の検討を行う際の方向性として以下を示した。（【資料1】P7）

「各教科等WGにおいて、整理した「高次の資質・能力」に基づき、より豊かな学習活動に繋がり、かつ、系統性等を損なわない範囲で、精選が可能な対象を慎重に特定しつつ、個別の資質・能力の整理を検討する。その際、表形式での示し方、「高次の資質・能力」の獲得に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るための余白が十分にあるか」といった視点からも検討」

- 今後、上記の方向性に加え、下記の留意点も踏まえつつ、各教科等WGで個別の資質・能力の整理と必要に応じた精選の検討を進めてはどうか
  - ✓ 暫定的に現行学習指導要領の内容に基づき、高次の資質能力を整理してきたWGもあることから、今後の検討にあたっては、現行の指導内容が全て等しく重要であると安易に判断しないように留意する必要
  - ✓ 個別の資質・能力を検討していく中で「高次の資質・能力」の在り方についても往還しながら更に改善を図っていく必要

## その他「高次の資質・能力」での構造化に当たり留意すべきポイントについて

### （「高次の資質・能力」について）

- 単学年ごとに「高次の資質・能力」を示している場合などで、「高次の資質・能力」が個別の内容事項と近接してしまい資質・能力の深まりが示せていないものもあり、そういった場合は複数の「高次の資質・能力」をまとめて水準を上げることも考えられるのではないか
- 特に「総合的な発揮」については、学びの成果として達成して欲しい姿として重要であると同時に、学習過程において、状況に応じて思考力・判断力・表現力を選択したり組み合わせたりしながら、繰り返し発揮される中で育成されていく側面を有するという視点も踏まえた示し方とすべき（一方、学習過程自体を記述するものではないことに留意が必要）
- 「高次の資質・能力」については、深い学びを実現する授業のイメージを教師が持てるようにする視点に加えて、児童生徒の多様性を包摂する授業づくりを進めるために活用するという視点も重要。このため、児童生徒の多様性を踏まえた多様なアプローチが許容されるものとなっている必要がある、そのためにも、特定の活動を想起させる狭い記載ではなく、できる限りスリムで骨太な記載とすべき

### （学校段階の特性を踏まえた共通性の確保について）

- 多くの教科を指導する小学校の教員から見ると、教科間の記載にばらつきが大きすぎると理解が進まない恐れ。各教科等の特性を踏まえつつも、各学校段階では一定の共通性を持って見られるよう抽象度の高さを含め一定の平準化が必要。他の学校段階や他教科等の表現も参考にしつつ、当該学校段階の発達段階を踏まえた「深い学び」の姿を具体的にイメージできるようになるかという共通の視点をもって検討が必要

### （資質・能力の3つの柱の性質を踏まえた整理について）

- 並列パターン、並行パターンといった形式上の違いはあれど、資質・能力の整理は本質的なところで共通している必要。特に「思考力・判断力・表現力等」については、これまでに習得した知識や技能を活用して、実社会・実生活などの場面を想定した課題解決に近い形で資質・能力を発揮するという性質の柱であり、「知識及び技能」とりわけ技能との適切な整理が必要。「学びに向かう力・人間性等」は「思考力・判断力・表現力等」の中で見取る方向で検討していることも踏まえ、異なる整理をしている教科においては、引き続き検討が必要

#### 4. 今般の構造化を単元・授業づくりに活かすプロセスの可視化

- 「高次の資質・能力」を基にした今般の構造化・表形式化は、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」について学びの深まりを可視化するとともに、それらを一体的に育成する学習の在り方を示し、教師一人一人が「深い学び」を具現化しやすくすることを目指すもの。
- 一方で、整理・構造化された資質・能力について理解を深めること、それらを活用して実際の単元・授業づくりに活かすこととの間には依然としてギャップがあるものと考えられる。「資質・能力」の深まりを捉えた後、それを実現する単元・授業をどのように構想し、実践に繋げていけばよいかを考えることは、特に経験の浅い教師にとっては、難しい場合もある。
- そのため、構造化・表形式化する学習指導要領について、単元・授業づくりのどういった場面でのどのように活用することで授業改善に繋げていくことができるのか、各教科等ごとに参考イメージを示すことにより、指導主事や経験が豊かな教師が、経験の浅い教師を指導する際のイメージを共有できるようにすることを検討してはどうか。(補足イメージ参照)
- ※ このことに関わって、前回改訂時の中教審答申においては各教科等固有の「深い学び」を実現する学習過程を精緻に示す試みが行われたが、多くの要素が盛り込まれ、教科等によっては複雑で実現が難しいものとなったとの指摘もある。また今般、個別最適な学びの実現の観点も踏まえ、「個に応じた学習過程」の充実を目指すこととしている。これらを踏まえると、今回は単一の学習過程を整理するのではなく、子供一人一人が深い学びを実現するための専門職としての教師の多様な単元・授業づくりを支えるという視点から、上記のように、構造化・表形式化された学習指導要領の活用イメージとして、参考資料を示すことが適当ではないか。
- ※ その際、このイメージはあくまでも参考の一つとして示し、現場の実践を過度に縛るものにならないよう留意が必要。実践者が子供の実態を踏まえて、多様で豊かな単元・授業づくりを行う際の足掛かりの一つと位置づけてはどうか。

#### 5. 用語の一層の整理・検討(高次の資質・能力)

- 企画特別部会では、今回の学習指導要領の一層の構造化の核となるものとして、「知識及び技能」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思考力・判断力・表現力等」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめて「中核的な概念等」と呼んで整理していたところ。
- これらの用語について、総則・評価特別部会では、新たな用語が増えることを避け、一人一人の教師が現行の学習指導要領の延長線上に今回の構造化を理解することができるようにする観点から、資質・能力の深まりを示すものを「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」、それらをまとめて「高次の資質・能力」と呼ぶことと整理した。(【資料1】P3参照)
- 「統合的な理解」「総合的な発揮」の呼称については、今回の構造化の趣旨の理解を進める上で効果的に働いている一方、「高次の資質・能力」という語については、各教科等WGでは、学校現場には単に「レベルの高い高度な資質・能力」として受け取られる等の誤解を招くのではないかといった懸念もあったところ。
- こうしたことも踏まえ、「高次の資質・能力」という用語については、今回の構造化を検討・議論する上の「足場」としては重要であり引き続き使用することとしつつも、実際に学習指導要領を告示する段階に向けて、更に適切な語があればそれを用いることとするか、または告示文の中ではあえて用いない(「統合的な理解」「総合的な発揮」のみで説明)こととしてはどうか。

## 6. 趣旨を実現するための教科書の在り方の更なる検討

- 企画特別部会の論点整理においては、今般の構造化の趣旨を踏まえて教科書の内容は「統合的な理解」「総合的な発揮」をつかみ取りやすくなるものに精選していくとともに、その分量の在り方に関しては、調整授業時数制度の下で、調整後の時数で十分に指導可能なものとなるよう検討すべきとの方針を示している。
- 一方で、教科書会社からは、そうした「高次の資質・能力」をつかみ取りやすい教科書は具体的にどのようなものかイメージが湧きにくいという声もあり、総則・評価特別部会においては、各教科等WGにおいて「高次の資質・能力をつかみやすい当該教科等の教科書の在り方について、内容の精選の在り方も含めて検討を行う」方針が示されているところ。（【資料1】P7）
- これらの方針を踏まえつつ、各教科等WGにおいては、
  - 3. に示す個別の資質・能力の整理と必要に応じた精選の検討を着実に進めていくとともに、
  - 「高次の資質・能力」をつかみ取りやすい単元・授業づくりに資する観点から、現在の教科書のどういった内容を精選対象とすることが考えられるか、またどういった構成上の工夫が考えられるかといった点についてのアイデア出しを行い、教科書会社における教科用図書の編纂の参考となるよう検討を進めることとしてはどうか。
- 中央教育審議会におけるこれらの検討状況も踏まえつつ、調整授業時数制度を活用して標準を下回って時数を設定した後の授業時数でも、教科用図書の内容を適切に取り扱った指導が可能となるような教科書編纂を促すための仕組み作りなどについて、検定調査審議会において具体的に検討することとしてはどうか。

## 7. 構造化・表形式化・デジタル化・調整授業時数・個に応じた学習過程の関係性の整理

- これまで、学習指導要領の構造化・表形式化と、デジタル化、調整授業時数制度をはじめとする柔軟な教育課程編成を促す仕組み、個に応じた学習過程の充実については、それぞれ一定の検討時間を要するものであったため、トピックを分けて具体化の議論を進めて来た。
- もとより、これらの方策はいずれも密接に関連している（※）ものであることから、トピックごとに一定の具体化が進んできた現段階において、相互の関係を改めてしっかりと可視化し、学校現場が一体的に理解できるよう示していくことが重要ではないか。

（※）相互の密接な関連の例

- 「高次の資質・能力」に基づく構造化・表形式化は、各教科等の「深い学び」を実現しやすくするために重要であるだけでなく、各学校が子供の実態に応じた柔軟な教育課程を編成したり、個に応じた多様な学習過程を充実する中であっても、外してはならない教育課程の「軸」を明確化する役割も有している。
- 「高次の資質・能力」で示した教育課程の「軸」をおさえつつ、子供の実態に合わせた柔軟な教育課程を編成・実施していく上では、系統性を確保しながら多様な実践アイデアを練る必要がある。このため、学習指導要領に示された内容を様々な角度から比較・参照して理解することや、データで出力して進捗管理に活用することを可能とするなど、学習指導要領のデジタル化による利便性の向上・活用幅の拡大が効果的と考えられる。
- 多様な子供一人一人に深い学びを実現していくためには、調整授業時数制度を用いて学校レベルでの教育課程を柔軟化することも重要であるが、その先に個々の児童生徒のレベルでの学習過程の質が個に応じたものとして改善していくことが求められる。そのためには、学習方略の指導等を含め、個に応じた学習過程の充実を支える方策の充実が重要となる。
- そのため、今後総則・評価特別部会において、これらの方策がどのように相互に関連しているかを一層明らかにしつつ、その結果としてどのような単元・授業づくりを目指そうとしているのかを取りまとめにおいて可能な限り示していくことが考えられるのではないか。

## 見方・考え方

見方  
考え方

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

## 英語の目標

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校 (英コミュ(総合)) (仮称)
英語によるコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、【P】聞くこと、話すことの言語活動を通して、次のとおり育成することを旨とする。	英語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを旨とする。	英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、次のとおり育成することを旨とする。	英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと及びこれら結び付けた統合的な言語活動を通して、次のとおり育成することを旨とする。

## 内容

### 思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校(英コミュ(総合)Ⅰ)(仮称)
<p>ごく身近な事柄話題について、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 情報などを聞き、内容を捉える推測することに慣れ親しむことができる。【理解する】</li> <li>・ 相手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどを話して伝えることに慣れ親しむことができる。【表現する】</li> <li>・ 相手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことに慣れ親しむことができ、相手を理解しようとする。【伝え合う】</li> </ul>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聞いて情報を整理し捉え、考えを形成するとともに、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現等の意味を考えながら読むことができる。【理解する】</li> <li>・ 自分の考えや気持ちなどを整理し、語句や表現等を選んで相手に話して伝えるとともに、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現等を用いて、書いて伝えることができる。【表現する】</li> <li>・ 相手の考えなどが話した内容を踏まえ、自分の考えや気持ちなどを、語句や表現等を選んで伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】</li> </ul>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聞いたり読んだりして必要な情報や考えなどを捉え、整理したり、既存の知識などや経験と関連付けたり比較したりして、考えを形成することができる。【理解する】</li> <li>・ 情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、表現等を工夫して他者に伝えることができる。【表現する】</li> <li>・ 相手の考えなど相手が話したり書いたりした内容を受け止めながら、情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、相手に分かりやすいように表現等を工夫して伝え合うことができ、相互理解を図る深めることができる。【伝え合う】</li> </ul>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聞いたり読んだりして、情報や基本的な構成や論理の展開を用いている文章や話から情報や考えなどの概要や要点、話し手や書き手の意図などを的確に捉え、整理したり、既存の知識などや経験と関連付けたり比較したりして、考えを形成してまとめることができる。【理解する】</li> <li>・ 情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、論理性に注意しながら内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して他者に適切に伝えることができる。【表現する】</li> <li>・ 相手の考えなど相手が話したり書いたりした内容を受け止めながら、情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、相手に分かりやすいように論理性に注意しながら内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して適切に伝え合うことができ、相互理解を図る深めることができる。【伝え合う】</li> </ul>

### 知識及び技能に関する統合的な理解

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校(英コミュ(総合)Ⅰ)(仮称)
英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことで、日本語と外国語の音声の違い等に気付くとともに、言語や文化の違いや共通点を体験的に理解している。	音声、語彙、表現及び文構造並びに【P】言語の働きなどを認識し、これらの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。	音声、語彙、表現、文構造及び文法並びに【P】言語の働きなどを認識し、これらの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。	音声、語彙、表現及び文法並びに【P】言語の働きなどを認識し、これらの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。

※小学校外国語活動においては、音声や基本的な表現への慣れ親しみを旨としており、上記「～でき／できる」については支援があって可能となるものである点を内容の取扱いで示してはどうか

※「知識及び技能に関する統合的な理解」における英語と日本語との違いについては、活動を通じた知・技の指導の在り方において別途議論

# 構造化のイメージ（小・外国語活動の例）

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
※緑マーカー：今回修正

外国語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
見方・考え方	外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること		
英語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
	英語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	ごく身近な事柄について、英語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝えるとともに、相手を理解しようとする態度を養う。

## 内容

高次の資質・能力	領域	第3学年相当		第4学年相当	
<b>思考力、判断力、表現力等</b> 相手のことや身の回りの物について、 ・情報などを聞き、内容を捉えることに慣れ親しむことができる。【理解する】 ・相手を意識しながら、自分の考えなどを話して伝えることに慣れ親しむことができる。【表現する】 ・相手を意識しながら、自分の考えなどを伝え合うことに慣れ親しむことができ、相手を理解しようとする。【伝え合う】	聞くこと	話題	相手のことや身の回りの物について ごく身近な事柄について ※後半以降を想定	（思・判・表）第4回の議論を踏まえ、 現行の英語の領域別目標を元に、 話題とできることについて段階的に示す	
		条件	ゆっくりはっきりと話されれば		
		できること	（ア）簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることに慣れ親しむことができる		
	話すこと（やり取り）	話題	基本的なやり取りに関する事柄について 自分のことや身の回りの物について 自分や相手のこと及びごく身近な事柄について ※後半以降を想定		（思・判・表）第4回の議論を踏まえ、 現行の英語の領域別目標を元に、 話題とできることについて段階的に示す
		条件	簡単な語句や基本的な表現を用いて （ア）挨拶、感謝、指示をしたりそれらに応じたりすることに慣れ親しむことができる（※基本的なやり取りに関する事柄に対応） （イ）動作を交えながら、自分の考えや気持ちを伝え合うことに慣れ親しむことができる（※自分のことや身の回りの物に対応） （ウ）サポートを受けて、質問をしたり質問に答えたりすることに慣れ親しむことができる（※自分や相手のこと及びごく身近な事柄）		
		できること			
話すこと（発表）	話題	身の回りの物について 自分のことについて ごく身近な事柄について ※後半以降を想定	（思・判・表）第4回の議論を踏まえ、 現行の英語の領域別目標を元に、 話題とできることについて段階的に示す		
	条件	簡単な語句や基本的な表現を用いて			
	できること	（ア）人前で実物などを見せながら、話すことに慣れ親しむことができる			
<b>知識及び技能</b> 音声や基本的な表現に慣れ親しむことで、日本語と外国語の音声の違い等に気付くとともに、言語や文化の違いや共通点を体験的に理解している。	英語の特徴等に関する事項	ア 音声		英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いに気付く	文字の取扱い（知・技）について丁寧に示す
		イ 文字		文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かる ・文字の名称を表す読み方を聞いて、大文字や小文字と結びつけられる ・身の回りの物を表す語句の発音を聞いて、何を指しているか分かる	
	[P]言語の働きに関する事項	次の事項について、使用される場面やその働きに、体験的に気付く ア …			
	文化に関する事項	・日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付く ・異なる文化を持つ人々との交流などを体験し、文化等に関する理解を深める			

※小学校外国語活動においては、音声や基本的な表現への慣れ親しみを目標としており、上記「～でき／できる」については支援があって可能となるものである点を内容の取扱いで示してはどうか  
 ※高次の資質・能力以外の内容の具体的な文言及び学年内における「できること」の段階付けについては、告示にあたり別途検討  
 ※第4回で議論した、校種間の接続のための留意事項（各学校段階で確実に身に付けさせるべき事項と、前学校種からの学びの接続のために重点をおいて指導すべき事項）については主として「内容の取扱い」に記載してはどうか（小学校外国語科、中学校も同様）

# 構造化のイメージ (小・外国語の例)

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
※緑マーカー：今回修正

外国語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------	--------------	--------------

**見方・考え方** 外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

英語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
英語の <b>特徴やまきり及び【P】言語の働き</b> などを理解するとともに、読むこと、書くことにおいて慣れ親しみ、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ英語の語彙や基本的な表現を読んだり書いたりして伝え合うことができる基礎的な力を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を図ろうとする態度を養う。	

内容	高次の資質・能力	領域	第5学年相当	第6学年相当
----	----------	----	--------	--------

<b>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、</b> ・聞いて情報を整理し、音声で十分に慣れ親しんだ表現等の意味を考えながら読むことができる。 <b>【理解する】</b> ・自分の考えなどを整理し、表現等を選んで相手に話して伝えるとともに、音声で十分に慣れ親しんだ表現等を用いて、書いて伝えることができる。 <b>【表現する】</b> ・相手の考えなどを踏まえ、自分の考えなどを、表現等を選んで伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。 <b>【伝え合う】</b>	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近な事柄について、 ・聞いて情報を整理し、音声で十分に慣れ親しんだ表現等の意味を考えながら読むことができる。 <b>【理解する】</b> ・自分の考えなどを整理し、表現等を選んで相手に話して伝えるとともに、音声で十分に慣れ親しんだ表現等を用いて、書いて伝えることができる。 <b>【表現する】</b> ・相手の考えなどを踏まえ、自分の考えなどを、表現等を選んで伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。 <b>【伝え合う】</b>	聞くこと 話題 自分のことや相手のことについて 条件 身近な事柄について 条件 ゆっくりはっきりと話されれば できること (ア) 簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができる (イ) 具体的な情報を聞き取ることができる ※後半以降を想定	第5学年相当 (ウ) 短い話の概要を捉えることができる	第6学年相当 (思・判・表) 第4回の議論を踏まえ、現行の英語の領域別目標を元に、話題とできることについて段階的に示す
		読むこと 話題 自分のことや相手のことについて 条件 身近な事柄について ※後半以降を想定 条件 音声で十分に慣れ親しんだ上で できること (ア) 簡単な語句や基本的な表現を読んでもその意味を理解識別することができる (イ) 簡単な語句や基本的な表現から具体的な情報を読み取る得ることができる	第5学年相当 自分のことや相手のこと及び身近な事柄について	第6学年相当 読むことについて丁寧に示す
		話すこと(やり取り) 話題 基本的なやり取りに関する事柄について 条件 自分のことや相手のこと及び身近な事柄について 条件 簡単な語句や基本的な表現を用いて (ア) 挨拶をしたり、指示や依頼にしたりすることができる (※基本的なやり取りに関する事柄に対応) (イ) 自分の考えや気持ちなどを述べ合うことができる (※自分のことや相手のこと及び身近な事柄に対応) (ウ) その場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができる (※自分のことや相手のこと及び身近な事柄に対応)	第5学年相当 自分のことや身近な事柄について 条件 簡単な語句や基本的な表現を用いて (ア) 自分の考えや気持ちを話すことができる (イ) 自分の考えや気持ちを伝えようとする内容を整理した上で、話すことができる	第6学年相当 書くことについて丁寧に示す
		話すこと(発表) 話題 自分のことや身近な事柄について 条件 簡単な語句や基本的な表現を用いて (ア) 自分の考えや気持ちを話すことができる (イ) 自分の考えや気持ちを伝えようとする内容を整理した上で、話すことができる	第5学年相当 自分のことや相手のことについて 条件 身近な事柄について ※後半以降を想定 条件 音声で十分に慣れ親しんだ上で できること (ア) 自分の考えや気持ちなどを表す語句や表現の一部を書き写すことができる (イ) 例となる語句や表現を参考に、自分の考えや気持ちなどを表す語句や表現を選んで書くことができる	第6学年相当 文字の取扱いについて丁寧に示す
		書くこと 話題 自分のことや相手のことについて 条件 身近な事柄について ※後半以降を想定 条件 音声で十分に慣れ親しんだ上で できること (ア) 自分の考えや気持ちなどを表す語句や表現の一部を書き写すことができる (イ) 例となる語句や表現を参考に、自分の考えや気持ちなどを表す語句や表現を選んで書くことができる	第5学年相当 音声の特徴を理解し、読んだり話したりする際に、場面や状況に応じて活用できる。また、聞いたり話したりする際に、音声の特徴に気付き、場面に応じて活用できる	第6学年相当 英語の文字を識別し、その読み方を発音したり、大文字、小文字を書いたりできるようにすることができる。また、符号の意味や使い方を理解し、読んだり書いたりする際に場面に応じて活用できる
		英語の特徴等に関する事項 ア 音声 イ 文字及び符号 ウ 語、連語及び慣用表現 エ 文及び文構造 【P】言語の働きに関する事項 ア ...	英語の特徴等に関する事項 ア 音声 イ 文字及び符号 ウ 語、連語及び慣用表現 エ 文及び文構造 【P】言語の働きに関する事項 ア ...	英語の特徴等に関する事項 ア 音声 イ 文字及び符号 ウ 語、連語及び慣用表現 エ 文及び文構造 【P】言語の働きに関する事項 ア ...

<b>音声、語彙、表現及び文構造並びに【P】言語の働きなどの知識を、場面や状況に応じて組み合わせて使うことにより、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。</b>	ア 音声 音声の特徴を理解し、読んだり話したりする際に、場面や状況に応じて活用できる。また、聞いたり話したりする際に、音声の特徴に気付き、場面に応じて活用できる	イ 文字及び符号 英語の文字を識別し、その読み方を発音したり、大文字、小文字を書いたりできるようにすることができる。また、符号の意味や使い方を理解し、読んだり書いたりする際に場面に応じて活用できる ・大文字や小文字の形を認識し、名称の読みができる ・音声と語句や表現を結びつけたり、音声と文字との関係に慣れ親しんだりすることができる ・コミュニケーションを行うために文字を書くことを意識させ、文字の形や長さなどを理解して、丁寧に語句や表現を書き写すことができる ・終止符や疑問符、コンマなどの基本的な符号の使い方を理解することができる	ウ 語、連語及び慣用表現 語、連語及び慣用表現が用いられる場面において、音声を中心に意味や使い方を理解することができる	エ 文及び文構造 日本語と英語の語順の違い等に気付くとともに、場面に応じて活用できる。なお、文を書き写す際には、語と語の区切りに注意して書き写すことができる ・文 ... ・文構造 ...
	【P】言語の働きに関する事項 ア ...	【P】言語の働きに関する事項 ア ...	【P】言語の働きに関する事項 ア ...	【P】言語の働きに関する事項 ア ...

※高次の資質・能力以外の内容の具体的な文言及び学年内における「できること」の段階付けについては、告示にあたり別途検討 ※文化等の理解については内容の取扱いや活動の例示で示す 10

# 構造化のイメージ（中学校の例）

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
※緑マーカー：今回修正

外国語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
見方・考え方	外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること		
英語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
内容	英語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、英語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深めようとする態度を養う。

	高次の資質・能力	領域	第1学年相当	第2学年相当	第3学年相当		
思考力、判断力、表現力等	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、様々な話題について、 ・情報や考えなどを捉え、整理したり、既存の知識などと関連付けたりして、考えを形成することができる。【理解する】 ・情報や自分の考えなどを整理し、表現等を工夫して伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えなどを受け止めながら、情報や自分の考えなどを整理し、表現等を工夫して伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】	聞くこと	話題	日常的な話題について 身近な社会的な話題について ※後半以降を想定			
			条件	簡単な語句や文で、はっきりと話されれば			
		読むこと	できること	(ア) 必要な情報を聞き取ることができる (イ) 概要を捉えることができる (ウ) 要点を捉えることができる			<div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;">                     (思・判・表) 第4回の議論を踏まえ、                      現行の英語の領域別目標を元に、                      話題とできることについて段階的に示す                 </div>
			条件	簡単な語句や文で書かれた			
		話すこと (やり取り)	話題	日常的な話題について (身近な話題について、(自分にとって) 興味・関心のある話題について) 身近な社会的な話題について ※後半以降を想定			
			条件	簡単な語句や文を用いて (ア) 自分の考えや気持ちなどを即興で伝え合うことができる (※身近な社会的な話題については対象としない) (イ) 事実や自分の考え、気持ちなどを整理し伝え合うことができる (ウ) 聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合うことができる			
		話すこと (発表)	できること	(ア) 自分の考えや気持ちなどを即興で話すことができる (※身近な社会的な話題については対象としない) (イ) 事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある内容を話すことができる (ウ) 聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことや感じたこと、その理由などを話すことができる			
書くこと	(ア) 情報や自分の考え、気持ちなどを文で書くことができる (イ) 事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができる (ウ) 聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことや感じたこと、その理由などを書くことができる						
知識及び技能	音声、語彙、表現、文構造及び文法並びに【P】言語の働きなどの知識を、場面や状況に応じて組み合わせて使うことにより、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。	英語の特徴やきまりに関する事項	ア 音声	音声の特徴を理解し、読んだり話したりする際に、場面や状況に応じて活用できる。聞いて意味を捉える際に、音声の特徴についての知識を活用できる			
			イ 符号	符号の意味や使い方を理解し、読んだり書いたりする際に場面や状況に応じて活用できる			
			ウ 語、連語及び慣用表現	語、連語及び慣用表現の意味や使い方を理解でき、聞いたり読んだりする際に、文脈に応じて活用できる。頻度の高いものについては、話したり書いたりする際にも、場面や状況に応じて活用できる			
			エ 文、文構造及び文法事項	文、文構造及び文法事項の意味、形式及び働きを理解し、聞いたり読んだり、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる			
			【P】言語の働きに関する事項	次の事項について、使用される場面や状況でどのような働きをするのかを理解し、聞いたり読んだり、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる			
			ア …	…			

※高次の資質・能力以外の内容の具体的な文言及び学年内における「できること」の段階付けについては、告示にあたり別途検討 ※文化等の理解については内容の取扱いや活動の例示で示す

# 構造化のイメージ（高・英語コミュニケーション（総合）（仮称）Ⅰの例）

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
 ※緑マーカー：今回修正

外国語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------	--------------	--------------

見方・考え方	外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること		
--------	---	--	--

英コミュ（総合）Ⅰ（仮称）の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
内容	英語の特徴やまきまり及び【P】言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて【P】適切に活用できる技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で基本的な構成や論理の展開を用いている文章や話から情報や考えなどの概要や要点、話し手や書き手の意図などを、的確に理解したり、これらを活用して、情報や考え、気持ちなどを、内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して論理性に注意しながら適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度を養う。

	高次の資質・能力	領域	
思考力、判断力、表現力等	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・基本的な構成や論理の展開を用いている文章や話から情報や考えなどを捉え、整理したり、既存の知識などと関連付けたりして、考えを形成してまとめることができる。 【理解する】 ・情報や自分の考えなどを整理し、内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して伝えることができる。 【表現する】 ・相手の考えなどを受け止めながら、情報や自分の考えなどを整理し、内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。 【伝え合う】	聞くこと 読むこと 話すこと（やり取り） 話すこと（発表） 書くこと	高次の資質・能力 領域 話題 日常的な話題について 身近なものを含む社会的な話題について 条件 話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、対話や基本的な構成の叙述、説明、放送、意見などを聞いて、 できること (ア) 話し手の意図を把握することができる（※日常的な話題に対応） (イ) 概要や要点を目的に応じて捉えることができる（※身近なものを含む社会的な話題に対応） 条件 使用される語句や文、情報量などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、基本的な構成の叙述文、説明文、意見文などを読んで、 できること (ア) 書き手の意図を把握することができる（※日常的な話題に対応） (イ) 概要や要点を目的に応じて捉えることができる（※身近なものを含む社会的な話題に対応） 条件 使用する語句や文、対話の展開などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、多様な基本的な語句や文を用いて、 (ア) 情報や自分の考え、気持ちなどを、即興で話して伝え合うやり取りを続けることができる（※日常的な話題に対応） できること (イ) 聞いたり読んだりして得られたことを活用しながら、情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、内容のまとまりなどを意識論理性に注意しながら表現等を工夫して話して伝え合うやり取りができる 条件 使用する語句や文、事前の準備などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、多様な基本的な語句や文を用いて、 (ア) 情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、内容のまとまりなどを意識論理性に注意しながら表現等を工夫して話して伝えることができる できること (イ) 聞いたり読んだりして得られたことを活用しながら、情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、内容のまとまりなどを意識論理性に注意しながら表現等を工夫して話して伝えることができる 条件 使用する語句や文、事前の準備などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、多様な基本的な語句や文を用いて (ア) 情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、内容のまとまりなどを意識論理性に注意しながら表現等を工夫して書いて伝えることができる できること (イ) 聞いたり読んだりして得られたことを活用しながら、情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、内容のまとまりなどを意識論理性に注意しながら表現等を工夫して書いて伝えることができる
			社会的話題に中学校との接続の観点から「身近なもの」を位置づけ
			領域別目標に位置づけていた「支援」を引き続き位置づけ
			「聞くこと」「読むこと」ではテキストのバリエーションを示す
			多様な基本的な語句や文を用いて
知識及び技能	英語の特徴やまきまりに関する事項 英語の特徴やまきまりに関する事項 【P】言語の働きに関する事項	ア 音声 イ 符号 ウ 語、連語及び慣用表現 エ 文、文構造及び文法事項	ア 音声 音声の特徴を理解し、読んだり話したりする際に、場面や状況に応じて活用できる。聞いて意味を捉える際に、音声の特徴についての知識を活用できる ……
			イ 符号 符号の意味や使い方を理解し、読んだり書いたりする際に場面や状況に応じて活用できる ……
			ウ 語、連語及び慣用表現 語、連語及び慣用表現の意味や使い方を理解でき、聞いたり読んだりする際に、文脈に応じて活用できる。頻度の高いものについては、話したり書いたりする際にも、場面や状況に応じて活用できる ……
			エ 文、文構造及び文法事項 文、文構造及び文法事項の意味、形式及び働きを理解し、聞いたり読んだり、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる ・文 …… ・文構造 …… ・文法事項 ……
			【P】言語の働きに関する事項 次の事項について、使用される場面や状況でどのような働きをするのかを理解し、聞いたり読んだり、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる ア ……

# 構造化のイメージ（高・英語コミュニケーション（発信）（仮称）I の例）

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
※緑マーカー：今回修正

外国語の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
見方・考え方	外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること		
英コミュ（発信）I（仮称）の目標	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
内容	英語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて【P】適切に活用できる技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、必要に応じて聞いたり読んだりしたことを活用しながら、英語で情報や考え、意見や主張などを、論理の構成や展開及び表現等を工夫して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度を養う。

	高次の資質・能力	領域			
思考力、判断力、表現力等	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・情報や自分の考え、意見や主張などを整理し、構成や表現等を工夫して、伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えなどを受け止めながら、情報や自分の考え、意見や主張などを、構成や表現等を工夫して伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】	話すこと（やり取り）	話題	日常的な話題について 身近なものを含む社会的な話題について	「話すこと（やりとり）」に日常的な会話を位置づけ
			条件	使用する語句や文、対話の展開などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、多様な基本的な語句や文を用いて (ア) 情報や自分の考え、気持ちなどを即興で伝え合うやり取りが円滑に進むよう方策を講じながら、会話を継続することができる (※日常的な話題に対応)	
			できること	(イ) やり取りを通して必要な情報を得ることができる (※日常的な話題に対応) (ウ) ディスカッションやディベートにおいて、聞いたり読んだりして得られた情報や考えなどを活用しながら、論理の構成や展開及び表現等を工夫して、情報や意見、主張などを話して伝え合うことができる	
		話すこと（発表）	条件	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、多様な基本的な語句や文を用いて (ア) 情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、論理の構成や展開及び表現等を工夫して話して伝えることができる (※日常的な話題に対応)	
			できること	(イ) スピーチやプレゼンテーションなどにおいて、聞いたり読んだりして得られたことを活用しながら、論理の構成や展開及び表現等を工夫して、情報や自分の意見、主張などを話して伝えることができる	「書くこと」にやり取りを位置づけ
			条件	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、必要に応じて支援を活用すれば、多様な基本的な語句や文を用いて (ア) オンラインなどで、情報や自分の考え、気持ちなどを書いて伝え合うやり取りを行うことができる (※日常的な話題に対応) (イ) 情報や自分の考え、気持ちなどを整理し、論理の構成や展開及び表現等を工夫して叙述文、説明文、意見文などを書いて伝えることができる (ウ) 聞いたり読んだりして得られた情報や考えなどを活用しながら、論理の構成や展開及び表現等を工夫して、叙述文、説明文、意見文などの形式で、情報や意見、主張などを書いて伝えることができる	
知識及び技能	音声、語彙、表現及び文法並びに【P】言語の働きなどの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。	英語の特徴やきまりに関する事項	ア 音声	音声の特徴を理解し、話す際に、場面や状況に応じて活用できる …	
			イ 符号	符号の意味や使い方を理解し、書く際に活用できる …	
			ウ 語、連語及び慣用表現	語、連語及び慣用表現の意味や使い方を理解でき、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる …	
			エ 文、文構造及び文法事項	文、文構造及び文法事項の意味と形式及び働きを理解し、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる …	
			オ 文章の論理の構成、論理の展開及び表現	様々な論理の構成・展開及びそれらに応じた表現を理解し、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる …	論理の構成・展開の具体的な内容を充実
			【P】言語の働きに関する事項	次の事項について、使用される場面や状況でどのような働きをするのかを理解し、話したり書いたりする際に、場面や状況に応じて活用できる ア … …	

# 高・英語コミュニケーション（総合）（仮称）の目標と高次の資質・能力（Ver.2）

見方・考え方

見方  
考え方

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
※緑マーカー：今回修正

## 英コミュ（総合）（仮称）Ⅰ

※下線は高・外国語の目標との主な相違点

英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと及びこれら結び付けた統合的な言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
目標	英語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて【P】適切に活用できる技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で <b>基本的な構成や論理の展開</b> を用いている文章や話から情報や考えなどを理解したり、これらを活用して、情報や考えなどを、 <b>内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して</b> 表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度を養う。
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・基本的な構成や論理の展開を用いている文章や話から情報や考えなどを捉え、整理したり、既存の知識などと関連付けたりして、考えを形成してまとめることができる。【理解する】 ・情報や自分の考えなどを整理し、 <b>内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して</b> 伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えなどを受け止めながら、情報や自分の考えなどを整理し、 <b>内容のまとまりなどを意識しながら表現等を工夫して</b> 伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】		
知識及び技能に関する統合的な理解	音声、語彙、表現及び文法並びに【P】言語の働きなどの知識を、場面や状況に応じて組み合わせることで、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。		

## 英コミュ（総合）（仮称）Ⅱ

「英コミュ（総合）Ⅰ」で育成した資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと及びこれら結び付けた統合的な言語活動を通して、次のとおり更に伸ばすことを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
目標	※英コミュ（総合）（仮称）Ⅰと同様	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で <b>多様な構成や論理の展開</b> を用いている文章や話から情報や考えなどを理解したり、これらを活用して、情報や考えなどを、 <b>基本的な構成等を用いながら表現等を工夫して</b> 表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	※英コミュ（総合）（仮称）Ⅰと同様
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・ <b>多様な構成や論理の展開</b> を用いている文章や話から情報や考えなどを捉え、整理したり、既存の知識などと関連付けたりして、考えを形成してまとめることができる。【理解する】 ・情報や自分の考えなどを整理し、 <b>基本的な構成等を用いながら表現等を工夫して</b> 伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えなどを受け止めながら、情報や自分の考えなどを、 <b>基本的な構成等を用いながら表現等を工夫して</b> 伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】		
知識及び技能に関する統合的な理解	※英コミュ（総合）（仮称）Ⅰと同様		

## 英コミュ（総合）（仮称）Ⅲ

「英コミュ（総合）Ⅱ」で育成した資質・能力を、【P】聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと及びこれら結び付けた統合的・**発展的**な言語活動を通して、次のとおり更に伸ばすことを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
目標	※英コミュ（総合）（仮称）Ⅰと同様	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で <b>やや複雑で多様な構成や論理の展開</b> を用いている文章や話から情報や考えなどを理解したり、これらを活用して、情報や考えなどを、 <b>構成や表現等を工夫して詳しく</b> 表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	※英コミュ（総合）（仮称）Ⅰと同様
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・ <b>やや複雑で多様な構成や論理の展開</b> を用いている文章や話から情報や考えなどを捉え、整理したり、既存の知識などと関連付けたりして、考えを形成してまとめることができる。【理解する】 ・情報や自分の考えなどを整理し、 <b>構成や表現等を工夫して詳しく</b> 伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えなどを受け止めながら、情報や自分の考えなどを、 <b>構成や表現等を工夫して詳しく</b> 伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】		
知識及び技能に関する統合的な理解	※英コミュ（総合）（仮称）Ⅰと同様		

# 高・英語コミュニケーション（発信）（仮称）の目標と高次の資質・能力（Ver.2）

見方・考え方

見方  
考え方

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

※黄マーカー：企画特別部会報告時に修正  
※緑マーカー：今回修正

## 英コミュ（発信）（仮称）Ⅰ

※下線は高・英語コミュニケーション（総合）との主な相違点

英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、【P】話すこと、書くこと及びこれらを聞くこと、読むことと結び付けた統合的な言語活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
目標	英語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて【P】適切に活用できる技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で情報や考え、意見や主張などを、構成や表現等を工夫して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	英語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深め、外国語の習得に継続して取り組もうとする態度を養う。
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・情報や自分の考え、意見や主張などを整理し、構成や表現等を工夫して伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えを受け止めながら、情報や自分の考え、意見や主張などを、構成や表現等を工夫して伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】		
知識及び技能に関する統合的な理解	音声、語彙、表現、文法、文章の構成及び論理の展開並びに【P】言語の働きなどの知識を、場面や状況に応じて組み合わせて使うことにより、英語による理解や表現の質が高まることを理解している。		

## 英コミュ（発信）（仮称）Ⅱ

「英コミュ（発信）Ⅰ」で育成した資質・能力を、【P】話すこと、書くこと及びこれらを聞くこと、読むことと結び付けた統合的な言語活動を通して、次のとおり更に伸ばすことを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
目標	※英コミュ（発信）（仮称）Ⅰと同様	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で情報や考え、意見や主張などを、構成や論理の展開、表現等を工夫して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	※英コミュ（発信）（仮称）Ⅰと同様
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・情報や自分の考え、意見や主張などを整理し、構成や論理の展開、表現等を工夫して伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えを受け止めながら、情報や自分の考え、意見や主張などを、構成や論理の展開、表現等を工夫して伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】		
知識及び技能に関する統合的な理解	※英コミュ（発信）（仮称）Ⅰと同様		

## 英コミュ（発信）（仮称）Ⅲ

「英コミュ（発信）Ⅱ」で育成した資質・能力を、【P】話すこと、書くこと及びこれらを聞くこと、読むことと結び付けた統合的・発展的な言語活動を通して、次のとおり更に伸ばすことを目指す。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
目標	※英コミュ（発信）（仮称）Ⅰと同様	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、英語で情報や考え、意見や主張などを、構成や論理の展開、表現等を工夫して詳しく表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	※英コミュ（発信）（仮称）Ⅰと同様
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、幅広い話題について、 ・情報や自分の考え、意見や主張などを整理し、構成や論理の展開、表現等を工夫して詳しく伝えることができる。【表現する】 ・相手の考えを受け止めながら、情報や自分の考え、意見や主張などを、構成や論理の展開、表現等を工夫して詳しく伝え合うことができ、相互理解を図ることができる。【伝え合う】		
知識及び技能に関する統合的な理解	※英コミュ（発信）（仮称）Ⅰと同様		

# 目標における「知識及び技能」のイメージ (Ver.3)

## 【第3回の案に対する御意見への対応】

- ・小・外国語：「読むこと」「書くこと」は外国語活動で取り扱っていないことから、まず慣れ親しんだ上で身に付けるというプロセスが重要であり、この点は引き続き明示してはどうか。  
日本語と外国語との違いに気付いた上で理解するというプロセスについては「内容」で明示し、端的に記載する観点から「目標」からは省略してはどうか。
- ・中高：中学校においては、小学校との接続の観点から「文構造」を明示してはどうか。一方、高校においては、「文構造」を明示する必要性は薄く、むしろ加わることにより文法重視の印象が高まる懸念があるため、現行のままとしてはどうか。
- ・高校：「目的や場面、状況などに応じて」については「適切に」を補足するものであることから「内容」で明示し、端的に記載する観点から「目標」からは省略してはどうか。

※上記に加え、英語の特徴やきまりに関する各事項と【P】言語の働きを区別するため、表現を修正。

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付く、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどを理解するとともに、読むこと、書くことにおいて慣れ親しみ、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	外国語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	外国語の特徴やきまり及び【P】言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

# 目標における「思考力、判断力、表現力等」のイメージ (Ver.3)

## 【第3回の案に対する御意見への対応】

- ・小・外国語：「推測しながら」「語順を意識しながら」は「内容の取扱い」で明示し、端的に記載する観点から「目標」からは省略してはどうか。
  - ・中高：「日常的な話題」や「社会的な話題」は「内容」で明示すること、また、「身近な社会的な話題」を位置づけることから、「目標」では「様々な話題」、「幅広い話題」としてはどうか。
  - ・高：既にできることをさらに円滑にすること等については、指導のプロセスであり「内容の取扱い」に位置づけるべきではないか。
- ※上記に加え、小学校の話題について第4回の内容を踏まえ修正。

また、高等学校について、端的に表すため「概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図など」を省略。

### 現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>身近で簡単な事柄</u> について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ <u>外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら</u> 読んだり、 <u>語順を意識しながら</u> 書いたりして、 <u>自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力</u> を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>日常的な話題や社会的な話題</u> について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる <u>力</u> を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>日常的な話題や社会的な話題</u> について、外国語で情報や考えなどの <u>概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図</u> などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる <u>力</u> を養う。



### 改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
ごく身近な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>身近な事柄</u> について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ <u>外国語の語彙や基本的な表現</u> を読んだり書いたりして、 <u>伝え合うことができる基礎的な力</u> を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>様々な話題</u> について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる <u>力</u> を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、 <u>幅広い話題</u> について、外国語で情報や考えなどを <u>的確に</u> 理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる <u>力</u> を養う。

# 目標における「学びに向かう力、人間性等」のイメージ (Ver.2)

現状

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>他者に配慮</u> しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮</u> しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、 <u>自律的に外国語を用いて</u> コミュニケーションを図ろうとする態度を養う。



改善イメージ

小学校 外国語活動	小学校 外国語	中学校	高等学校
外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、粘り強く自分の考えや気持ちを伝えるとともに、相手を理解しようとする態度を養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、 <u>対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を図ろうとする態度</u> を養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を <u>深めようとする態度</u> を養う。	外国語によるコミュニケーションなどに興味・関心を持ち、他者との対話・協働を通して考えを広げたり深めたりするとともに、自らの学習を調整して、他者との相互理解を深め、 <u>外国語の習得に継続して取り組もうとする態度</u> を養う。



# **「AI時代に外国語を必修とする 本質的意義を踏まえた検討」について**

## 【現状と課題】

### 本質的意義を踏まえた検討の必要性

- 本WGでは、AI時代に外国語を必修とする本質的意義について、「言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと」「自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること」の両面から検討してきたところ
- 特に、前者については、多様性の包摂や多文化共生に対する理解のために、多様な文化を理解することや、母語や自国の文化のメタ認知を促すために、日本語と外国語の違い等について理解することの重要性が繰り返し指摘されてきた
- 文化についてはこれまでも学習指導要領において、我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養う観点が含まれていたが、指導・評価することが難しいとの指摘も
- 次期学習指導要領においては、上記の議論も踏まえ、多様な文化への理解や、日本語と外国語の違い等の理解に関する内容を充実させる方向で検討することが必要



## 【方向性と具体的論点（案）】

### 検討の方向性

#### （１）多様な文化の理解

- 現行の小学校の外国語活動では、外国語学習の導入段階であるため、「内容」の知・技の一部として、文化について学ぶこととなっている
- 小学校の外国語科以降は、教科として学習評価の対象となるところ、文化の知識を知・技として評価を求めることは趣旨になじまないと考えられる。また、単に知識として知っているのみではなく、思・判・表の一環として、外国語の言語文化や相手の文化的背景を踏まえた配慮ができるようになることを目指すべきではないか
- このため、小学校～高等学校の外国語科においては、文化を「内容の取扱い」や「教材の選定の観点」に位置付け、教材や活動を通して文化の多様性を扱うことを促してはどうか

#### （２）日本語と外国語の違い等の理解

- 現行の小学校の外国語活動・外国語では、「内容」の知・技において、英語と日本語の違いに気付くこととしている。また、中学校においても、「内容の取扱い」において、音声や文法などの指導にあたり、日本語との違いに留意することとしている
- 一方、高校では「指導計画の作成」において日本語との違いに留意することとしているが、中学校と同様に「内容の取扱い」に位置付けてはどうか
- さらに、言語や文化の違いや共通点に気づいたり理解することにより、母語や母語による思考のメタ認知につながると考えられる。このため、「教材の選定の観点」に位置付け、教材を通して多様なものの見方や考え方があることへの理解を促してはどうか

#### （３）その他

- 今後、指導において参考となる動画や資料を提供する際には、上記（１）及び（２）の観点も踏まえて作成してはどうか
- 現行では、「海外から帰国した生徒や外国人の生徒の指導」に関し、「外国語科において、外国語でコミュニケーションを行ったり、外国語の背景にある生活や文化などについて理解を深める学習活動を進めたりする際に配慮を行うことなどが考えられる」旨が総則の解説のみに示されているが、上記（１）及び（２）の解説においても、同様に示してはどうか  
(解説で示す要素については、告示にあたり別途要検討)

※本資料はあくまで盛り込むべき要素のイメージを示したものであり、実際の学習指導要領本文及び説明の文章は議論を踏まえて引き続き検討。  
 ※赤字が新たに盛り込む要素（「指導計画の作成と内容の取扱い」は現行の記載を基にしている）。

## 小学校（外国語活動）

### 第4章 外国語

#### 第1 目標

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。（知識及び技能）

##### （見方・考え方）

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

#### 第2 各言語の目標及び内容等 英語

##### 2 内容

##### 知識及び技能

（統合的な理解）英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことで、日本語と外国語の音声の違い等に気付くとともに、言語や文化の違いや共通点を体験的に理解している。

##### 英語の特徴等に関する事項

ア 音声 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いに気付く

##### 文化に関する事項

- ・日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付く
- ・異なる文化を持つ人々との交流などを体験し、文化等に関する理解を深める

#### 3 指導計画の作成と内容の取扱い

##### (1)（指導計画の作成）

オ 外国語活動を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めるようにすること。言語活動で扱う題材についても、我が国の文化や、英語の背景にある世界の文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つものとすること

## 小学校（外国語）

### 第2章 第10節 外国語

#### 第1（見方・考え方）

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

#### 第2 各言語の目標及び内容等 英語

##### 2 内容

##### 知識及び技能

##### 英語の特徴等に関する事項

##### エ 文及び文構造

日本語と英語の語順の違い等に気付くとともに、場面に応じて活用できる。

#### 3 指導計画の作成と内容の取扱い

##### (3)（教材選定の観点）

イ 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然などに関するものの中から、児童の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点到に配慮すること。

(ア) 我が国の文化や、英語の背景にある世界の多様な文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと。

(イ) 言語や文化の違いや共通点、多様なものの見方や考え方があることを理解することにより、多様性の包摂や他者との相互理解を図ろうとする態度を養うのに役立つこと。多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てることに役立つこと。

(ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うとともに、多文化共生に対する理解を促すことに役立つこと

# 文化及び英語と日本語の違いについて盛り込む要素（中・高のイメージ）

※本資料はあくまで盛り込むべき要素のイメージを示したものであり、実際の学習指導要領本文及び説明の文章は議論を踏まえて引き続き検討。  
 ※赤字が新たに盛り込む要素（「指導計画の作成と内容の取扱い」は現行の記載を基にしている）。

## 中学校

### 第2章 第9節 外国語

#### 第1（見方・考え方）

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

#### 第2 各言語の目標及び内容等 英語

##### 3 指導計画の作成と内容の取扱い

###### (2) (内容の取扱い)

イ 音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、練習などを通して2の(1)のAに示す言語材料を継続して指導するとともに、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできることに留意すること。また、発音と綴りとを関連付けて指導すること。

II 文法事項の指導に当たっては、次の事項に留意すること。

(ウ) 用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるようにするとともに、語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。

オ コミュニケーション活動及びコミュニケーションを支える活動の中で、日本語と英語の音声や語彙、文構造、文法などの違いに気付かせることに留意しながら指導すること。

カ 多様な他者との相互理解を図るためには相手の文化的背景などに配慮したコミュニケーションが重要であることの理解を深めるとともに、活動においては相手に配慮してコミュニケーションを行えるよう工夫すること。

###### (3) (教材選定の観点)

イ 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点到に配慮すること。

(ア) 我が国の文化や、英語の背景にある世界の多様な文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。

(イ) 言語や文化の違いや共通点、多様なものの見方や考え方があることを理解することにより、多様性の包摂や多様な他者との相互理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。  
多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

(ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うとともに、多文化共生に対する理解を促すのに役立つこと。

## 高等学校

### 第2章 第8節 外国語

#### 第1款（見方・考え方）

外国語及び外国語によるコミュニケーションを文化の違いや社会及び相手との関わりに着目して捉え、他者の考えを受け止めるとともに、表現等を工夫して自分の考え等を発信し、多様な他者との相互理解を図ること

#### 第2款 各科目

##### 第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

###### 1 (指導計画の作成)

(7) 言語能力の向上を図る観点から、言語活動などにおいて国語科と連携を図り、指導の効果を高めるとともに、日本語と英語の語彙や表現、論理の展開などの違いや共通点に気付かせ、その背景にある歴史や文化、習慣などに対する理解が深められるよう工夫すること。

###### 2 (内容の取扱い)

(7) コミュニケーション活動及びコミュニケーションを支える活動の中で、日本語と英語の音声や語彙、文構造、文法、論理の展開などの違いに気付かせることに留意しながら指導すること。

(8) 多様な他者との相互理解を図るためには相手の文化的背景などに配慮したコミュニケーションが重要であることの理解を深めるとともに、活動においては相手に配慮してコミュニケーションを行うよう工夫すること。

###### 3 (教材選定の観点)

(2) 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点到に配慮すること。

(ア) 我が国の文化や、英語の背景にある世界の多様な文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。

(イ) 言語や文化の違いや共通点、多様なものの見方や考え方があることを理解することにより、複眼的に社会や世界を見る力や多様性の包摂、多様な他者との相互理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。  
多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

(ウ) 社会がグローバル化する中で、広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うとともに、多文化共生に対する理解を促すのに役立つこと。

(オ) 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

## 外国語の「見方・考え方」

高等学校

### 言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育む

- 異なる言語・文化への理解を促す
- 母語や自国の文化のメタ認知を促す
- コミュニケーションへの深い理解を促す

**言語習得**：外国語によるコミュニケーションにおいて、相手の文化的背景などを踏まえて配慮ができる

**相互理解**：言語や文化の違いや共通点、多様なものの見方や考え方があることを理解することにより、多様な他者との相互理解を深めようとする

(参考：現行の解説)

- 相手の外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくることを理解できる
- 他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てる
- 我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知ることとともに、そうしたことに興味をもち、理解を深めようとする態度を育成する
- 世界の中の日本人であることの自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うように配慮する

中学校

**言語習得**：外国語によるコミュニケーションにおいて、相手の文化的背景などを踏まえた配慮を図ろうとする

**相互理解**：言語や文化の違いや共通点、多様なものの見方や考え方があることを理解することにより、多様な他者との相互理解を深めようとする

(参考：現行の解説)

- 相手の外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくることを理解できる
- 他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てる
- 我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知ることとともに、そうしたことに興味をもち、理解を深めようとする態度を育成する
- 世界の中の日本人であることの自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うように配慮する

小学校・外国語

**言語習得**：外国語によるコミュニケーションにおいて、日本語と英語の違いに気付き、外国語の言語文化に慣れ親しむ

**相互理解**：我が国の文化や、世界の多様な文化に対する関心を高め、理解を深めようとする

(参考：現行の解説)

- 日本語との音声の違いにとどまらず、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについても日本語との違いに気付く
- 気付きで終わるのではなく、それらが外国語でコミュニケーションを図る際に活用される、生きて働く知識として理解される
- 多様な考え方を理解し、柔軟に対応することや、公正な判断力を養い、相手の状況や立場を共感的に理解できる心情を育成する
- 我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知ることとともに、そうしたことに興味をもち、理解を深めようとする態度やお互いの文化を尊重する態度を育成する
- 複数の文化に触れることが、(略) 英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにもつながっていく日本の文化や価値観、考え方などについての自覚を高める

小学校・外国語活動

**言語や文化の違いや共通点を体験的に理解し、外国語や外国語によるコミュニケーションに慣れ親しむ**

(参考：現行の解説)

- 外国語と日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く
- 日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付く
- 異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文化等に対する理解を深める
- 母語と外国語を比べることで、言語には普遍性と固有性があることに気付く
- 母語の性質や価値、外国語の性質や価値をよりよく理解できるようになる

# AI時代に外国語を必修とする「本質的意義」の再整理 (Ver. 3)

— 自らの人生を舵取りできる、多様な他者と協働できる資質・能力への貢献の観点から —

## 1. 言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと

### ● 異なる言語・文化への理解を促す

- 自らと異なる他者の言語や文化等との接触・理解・共感・受容
- 言語習得の困難の経験による外国人や日本語学習者の立場・心情の理解
  - ➔ 以上が相まって、多様な主張や価値観への寛容性を生み、多様性の包摂や多文化共生に対する理解を促す可能性

### ● 母語や自国の文化のメタ認知を促す

- 外国語と対比されることにより、母語の特徴や良さの認知に繋がる
- 外国の文化と対比されることにより、自国の文化への理解が深まる
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される

### ● コミュニケーションへの深い理解を促す

- 言語や文化のメタ認知やコミュニケーション等の経験を通じた相手意識の向上
  - ・相手の言葉や意図の受け止め方 (聞く・読む)
  - ・相手や相手の文化への配慮、コミュニケーションの目的、場面や状況等に応じた表現、自分の言葉の分かりやすさ (「やさしい日本語」にも繋がる) (話す・書く)
- 伝わらないもどかさや失敗を乗り越えるレジリエンスや伝わることによる自己肯定感等の高まり、それらを行き来する経験
- ノンバーバル・コミュニケーションの重要性の理解や表現方法の工夫 (アイコンタクト、間の取り方、身振り・手振り等)
  - ➔ 以上が相まって、翻訳ツール等によるやり取りを超えた、生身の身体を有する人間同士のリアルなコミュニケーションへの関心・意欲を促す可能性

## 2. 自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること

### ● 外国語を介して、自分の考え・意見の形成・整理が促進される

- 外国語を通じて流通する多様な主張や価値観、感性への接触・受容
- 外国語で対話・協働するために、普段から自分の考え・意見を整理したり、外国語ならではの論理展開で伝える意識が向上する
- 外国人に伝えるため、自国の歴史・文化を学ぶ動機付けが促される (再掲)
  - ➔ アウトプットを意識した効果的インプットや論理的思考力の伸長を促す可能性

### ● 人間関係の質・量が豊かになり、得られる情報も増える

- 世界中の様々な人々と直接つながり、信頼関係の構築が可能となる
- 人間同士のリアルなコミュニケーションにより、翻訳やAIを介する場合と比べて得られる情報が格段に広がり、多面的視野に繋がる
- 異なる言語でのコミュニケーションを通じて新たな自分を発見できたり、より広い視野から自分の好き・得意を考えたり、複言語・複文化の強みを生かして将来の選択肢が広がる可能性も

※現在のAI技術を前提とした場合ではあるが、AIにより手軽に翻訳・通訳が可能となる中であっても、出力の正確性・適切性を批判的に検討したり、ツールの力も使いつつも、リアルなコミュニケーションを行ったりするためには相応の英語力が必要という視点や、外国語によるコミュニケーションのためにAI技術を効果的に活用する力が必要という視点もある

※これらは外国語を学校教育で必修とすることの意義を卒業後も継続的に学習した場合も想定しながら整理したものであり、これらの全てが、全ての児童生徒において、初等中等教育の過程で高いレベルで発現すると考えているものではない

※AI技術が今後も予想を超える速さで進歩することを踏まえると、AIに代替されるべきではない、人間に残したい部分は何かを重視する必要(下線部分)

よりよい社会  
(社会のウェルビーイング)

- 多様性の包摂、国内外の多様な他者との共生・共創
- グローバルな視点・情報を駆使した価値創造・課題解決
- 持続可能な民主主義・平和な社会の構築

幸福な人生  
(個人のウェルビーイング)

- 国内外の多様な他者と直に意思疎通できる安心感・自信、豊かな人間関係
- 言葉の壁や国境を越えて自らの人生を舵取り (進学・留学・就職)
- 思考の多様性・柔軟性、価値観の再構築

# 【参考】現行の学習指導要領における「文化」等に関する主な記載（小学校・外国語活動）

## 【本文】

- 目標** (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。  
(3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

## 内容

### 【知識及び技能】

(1) 英語の特徴等に関する事項 実際英語を用いた言語活動を通して、次の事項を体験的に身に付けることができるよう指導する。

イ 日本と外国の言語や文化について理解すること。

(ア) 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさ気付くこと。

(イ) 日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付くこと。

(ウ) 異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文化等に対する理解を深めること。

### 【指導計画の作成】

オ 外国語活動を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めるようにすること。言語活動で扱う題材についても、我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つものとする。

## 【解説】

**目標（1）** 「言語や文化について体験的に理解を深め」とは、外国語活動において、児童のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、日本語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めることを指している。その際、知識のみによって理解を深めるのではなく、体験を通して理解を深めることとしている。体験的に理解を深めることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付いたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これらを尊重する態度を身に付けたりすることは、国語科学習にも資するものと考えられる。また、これらのことは、後述する「学びに向かう力、人間性等」にもつながるものである。

**目標（3）** ところで、高学年の外国語科では、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」としているのに対して、中学年の外国語活動では、「言語やその背景にある文化に対する理解を深め」としたのは、学習対象である外国語などの固有の言語だけでなく、日本語も含めた言語の普遍性について体験的に気付くことが重要であることからである。母語以外の言語を学び、母語と外国語を比べることで、言語には普遍性と固有性があることに気付く、そうすることで母語の性質や価値、外国語の性質や価値をよりよく理解できるようになる。つまり、母語を、外国語を通して相対化することができるということである。このことは、児童の母語の力をより確かなものにするにつなげる。中学年の外国語活動においてそのようにして体験的に気付くことが、高学年以降の外国語学習への意欲につながると考えられる。

**知技（1）イ（イ）** 地域の生活、習慣、行事などを積極的に取り上げていくことが期待される。また、その際には、児童にとって身近な日常生活における食生活や遊び、地域の行事などを取り扱うことが適切である。外国語活動を通して、多様な文化の存在を知り、また、日本の文化と異文化との比較により、様々な考え方があることに気付くとともに、我が国の伝統文化についての理解を深め、英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにつながっていくことが期待される。これらの事項は、単なる知識として指導するのではなく、体験的な活動を通して具体的に気付かせていくことが大切である。例えば、日本の一日の生活を題材にした英語での絵本の読み聞かせを通して、「いただきます」という表現にうまく合致する表現が英語にはないことに気付かせたり、映像資料などを通して世界の遊びと日本の遊びには共通点や相違点があることに気付かせたりするよう、活動の工夫が求められる。

**知技（1）イ（ウ）** (イ) で触れたように、「日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付くこと」は、外国語活動における大切な指導事項である。この事項は、体験的な活動を通して指導されるべきものである。そこで、ALTや留学生、地域に住む外国人など、異なる文化をもつ人々との交流などを通して、体験的に文化等の理解を深めることが大切になる。

**指導計画オ** 外国語活動を通して、様々な国の生活や文化と我が国の生活や文化との共通点や相違点に気付くようにするとともに、言語や文化に関心をもち、尊重できる態度を育成することが大切である。特に、外国語や外国の文化を扱う際には、様々な言語に触れたり、人々の日常生活に密着した生活文化や学校に関するものなど幅広い題材を取り扱ったりすることで、児童の興味・関心を踏まえ、特定のものに偏らないように心がけることが重要である。同時に、国語や我が国の文化について理解を深め、その特徴や良さについて発信することができるような指導を大切にしたい。例えば、様々な言語での挨拶、数え方、遊び、文字などを扱うことで、日本のお辞儀の習慣やひらがな、カタカナ、漢字などの字、じゃんけんなど、共通点や相違点に気付かせ、それぞれの特徴や良さを発表し合うような活動が考えられる。その際には、知識の伝達に偏らないように注意する必要がある。これらの活動を通して、児童が国語や我が国の文化に対する理解を深め、世界の人々と相互の立場を尊重、協調しながら交流を行っていきけるようにすることをねらいとしている。

# 【参考】現行の学習指導要領における「文化」等に関する主な記載（小学校・外国語①）

## 【本文】

- 目標** (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

## 【解説】

**目標（1）** 本目標での「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解する」とは、中学年の外国語活動の「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付く」に対応したものである。高学年の外国語科では、日本語との音声の違いにとどまらず、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについても日本語との違いに気付くこと、さらに、気付きで終わるのではなく、それらが外国語でコミュニケーションを図る際に活用される、生きて働く知識として理解されることを求めている。

（略）中学年における外国語活動で音声や基本的な表現に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に「読むこと」、「書くこと」を加え、これまでの課題に対応するため、英語の文字や単語などの認識、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、語順の違い等の文構造への気付きなど、言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解などを促す指導が求められる。

**目標（3）** 本目標での「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」は、中学年の外国語活動において「言語やその背景にある文化に対する理解を深め」としていることを踏まえたものである。中学年の外国語活動では、学習の対象となる外国語のみならず、日本語も含めた様々な言語そのものへの理解や言語の背景にある文化に対する理解を深めることを求めている。そのような理解が、高学年の外国語科で、対象となる外国語の背景にある文化に対する理解の深まりへとつながる。

ところで、外国語の背景にある文化に対する理解が深まることは、その言語を適切に使うことにつながる。また、言語を学ぶことは、その言語を創造し継承してきた文化や、その言語を母語とする人々の考え方を学ぶことでもある。更に、言葉を通じて他者とコミュニケーションを図り伝え合う力を高めることで、積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者と共感するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度につながると考えられる。そして、このことは、言語能力の側面から「学びに向かう力、人間性等」を支えることになる。

なお、中学校の外国語科において、改訂前は、「言語や文化に対する理解深め」とし、その「文化」を「その言語の背景にある文化」と解説していたが、今回の改訂により、「外国語の背景にある文化」とし、その意味合いを明確にしている。さらに、英語が国際共通語であることを踏まえると、外国語の背景にある文化だけでなく英語を使ってコミュニケーションを図る人々の文化についても理解を深めることが大切である。

# 【参考】現行の学習指導要領における「文化」等に関する主な記載（小学校・外国語②）

## 【本文】

### 内容

#### [知識及び技能]

##### Ⅰ 文及び文構造

次に示す事項について、日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに、基本的な表現として、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること。

#### [教材選定の観点]

イ 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然などに関するものの中から、児童の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点到に配慮すること。

(ア) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てることに役立つこと。

(イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと。

(ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うことに役立つこと。

## 【解説】

**知識及び技能 Ⅰ 文及び文構造** 文及び文構造については、第2の2(3)①で示すような言語活動の中で、文法の用語や用法の指導を行うのではなく日本語と英語の語順の違い等の気付きを促すようにしたり、基本的な表現として繰り返し聞いたり話したりするなどして活用したりすることが求められる。繰り返し触れることによって英語の語順に気付け、その規則性を内在化させたり、自ら話したり書いたりする中でどのように語と語を組み合わせれば自分の伝えたいことが表現できるのかということに意識を向けさせたりするようにする。

**教材選定の観点イ** 題材としては、英語を使用している人々の日常生活等を取り上げるとともに、英語以外の言語を使う人々の日常生活も取り上げることも配慮することが求められている。世界には英語以外の言語を話す人々も多い。そのことから、世界の人々を理解するには、英語以外の言語を使う人々の日常生活も取り上げることが大切である。また、それに加えて、ここでは、日本人の日常生活等も取り上げることが大切であると述べている。日本人の日常生活を取り上げることにより、日本人との比較の中で、世界の人々の日常生活に関する理解が深まり、また、日本人のことについても、世界の人々の日常生活と比較することで、より深い理解につながることをねらっている。日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然などを取り上げる際は、児童の発達の段階に配慮し、それぞれの地域の家庭や学校生活などを中心としたもの、また、例えば他教科等で学んだ歴史上の人物や建造物、伝統文化、自然等を取り上げ、児童が興味・関心をもって取り組めるような題材を選択することが大切である。

(ア) グローバル化が進展する中で、児童は多様な文化や価値観をもった人々と出会うことになる。そのような社会で生きていくためには、多様な考え方を理解し、柔軟に対応することや、公正な判断力を養い、相手の状況や立場を共感的に理解できる心情を育てることが大切である。そのためには、児童が、様々な人々の行動や考え方等が示された事例などに接することが大切となる。それらの事例を通して、相手の状況や立場を共感的に理解できる心情を育てていくことが可能となる。児童の発達の段階に配慮し、分かりやすい事例や活動を含む教材を選ぶことが大切になる。

(イ) 英語の学習を通して、我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点相違点を知るようになるとともに、そうしたことに関心をもち、理解を深めようとする態度やお互いの文化を尊重する態度を育成することが大切である。複数の文化に触れることが、我が国の伝統文化についての理解を深め、文化の多様性に対してより寛容になることに資するとともに、英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにもつながっていくことが考えられる。また、児童の発達の段階に配慮して、海外や我が国の文化を扱った教材の選定が求められる。

(ウ) 国際社会と向き合って生きていくためには、多様な価値観や考え方をもち、我が国の一員としての自覚をもち、積極的に交流を図り、協調、協力していく必要がある。題材の選択に当たっては、広い視野から国際理解を深め、国際協調の精神を養うことに役立つもので、かつ、日本の文化や価値観、考え方などについての自覚を高めることができるようなものを選択する必要がある。

# 【参考】現行の学習指導要領における「文化」等に関する主な記載（中学校）

## 【本文】

**目標** (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

## 内容

### [教材選定の観点]

イ 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点到に配慮すること。

(ア) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

(イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。

(ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

## 【解説】

**目標(3)** 本目標での「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」については、改訂前は「言語や文化に対する理解を深め」となっており、その「文化」を「その言語の背景にある文化」と解説していたことから、今回の改訂においてはその意味合いを明確に示した。また、「言語」を外して「(外国語の背景にある)文化に対する理解」としたのは、「コミュニケーションを図ろうとする態度」を養う上では、次に述べる「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」コミュニケーションを図ることが大切であり、その一つとして相手の外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくることが考えられるためである。併せて、外国語の学習を通して、他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てることも必要である。

**教材選定の観点イ** 「日常生活、風俗習慣」とは、家庭や学校、社会における日常の生活や風俗習慣などを示している。学年が進むにつれて、これらのことについての人々の考え方や態度を含めて取り扱うことになる。英語の学習を通して、人々の生活や風俗習慣の相違に一層の関心をもたせ、文化の多様性に注目させることが必要である。(略)

「伝統文化」とは、昔から伝えられてきた風習・制度・思想・技術・芸術などを示している。国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、外国の伝統文化について知ることは、幅広い国際的な視野を身に付ける観点から大切なことである。また同時に、自国の伝統文化について外国の人々に発信できる素養を培うことも必要であり、そのための適切な題材を選択することが求められる。

(ア) 公正な判断力や豊かな心情を身に付ける上で、様々な人々の考え方に接することのできる適切な題材を選ぶことが必要であることを示したものである。広く他の国の人々の考え方などを知ることにより、それらに対して寛容になるとともに、公平に正しく判断する力を養うことにもなる。また、様々な人々を理解することを通して豊かな人間性を育てることにもなる。題材については、英語を使用している人々をはじめ世界の様々な人々の多様な考え方や行動の仕方について知ることができるものを選択することが大切になる。

(イ) 英語の学習を通して、我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知ることになるとともに、そうしたことに関心を持ち、理解を深めようとする態度を育成することが大切である。複数の文化に触れることが、我が国の伝統文化についての理解を深め、文化の多様性に対してより寛容になることに資するとともに、英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにもつながっていくことが考えられる。そのような観点から適切な題材を選ぶことが必要であることを示したものである。

ここで言う「文化」とは、日本語や英語を用いる人々の日常生活に密着した衣食住に関わる生活文化をはじめ、文学・科学技術・学問・芸術等に関わることも含む幅広い分野にわたる文化のことである。この場合、生徒の発達の段階にふさわしいものの中から、生徒の興味・関心を踏まえ、特定のものに偏ることなく、文化に対する関心や理解を高めるのに役立つ題材を取り上げる必要がある。

(ウ) 中央教育審議会答申では、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることを想定し、その能力の向上を課題として掲げている。そこで、外国の文化や考え方などについて受け身的に学ぶだけでなく、日本の文化や日本人の考え方を積極的に外国の人々に知らせるといった観点から、ふさわしい題材の選択が必要になってくる。題材の選択に当たっては、広い視野から国際理解を深め、国際協調の精神を養うのに役立つもので、生徒の興味・関心を引き出し育てることのできるような適切なものを選択するなどして、正しい理解が図れるように配慮することが大切である。その際、文化の多様性や価値の多様性に気付かせ、異文化を受容する態度を育てる。さらに、世界の国々の相互依存関係を正しく認識させるなど、生徒に世界の中の日本人であることの自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うように配慮することが大切である。

# 【参考】現行の学習指導要領における「文化」等に関する主な記載（高等学校①）

## 【本文】

**目標** (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

## 内容

### [指導計画作成上の配慮事項]

(7) 言語能力の向上を図る観点から、言語活動などにおいて国語科と連携を図り、指導の効果を高めるとともに、日本語と英語の語彙や表現、論理の展開などの違いや共通点に気付かせ、その背景にある歴史や文化、習慣などに対する理解が深められるよう工夫をすること。

## 【解説】

**目標（3）** 本目標における「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」については、改訂前は「言語や文化に対する理解を深め」となっており、その「文化」を「その言語の背景にある文化」と解説していたことから、今回の改訂においてはその意味合いを明確に示した。また、「言語」を外して「（外国語の背景にある）文化に対する理解」としたのは、「コミュニケーションを図ろうとする態度」を養う上では、次に述べる「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」コミュニケーションを図ることが大切であり、外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくるためである。あわせて、外国語の学習を通して、他者に配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てることも重要である。

**指導計画作成上の配慮事項（7）** この配慮事項は、言語能力の向上が、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成に関わる重要な課題であるという平成28年12月の中央教育審議会答申に基づき、国語科の指導内容とのつながりについて述べたものである。国語教育と英語教育は、学習の対象となる言語は異なるが、共に言語能力の向上を目指すものであるため、共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。各学校において指導内容や指導方法等を適切に連携させることによって、英語教育を通して日本語の特徴に気付いたり、国語教育を通して英語の特徴に気付いたりするなど、日本語と英語の言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促すことにより、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。例えば、国語科との連携については、「自分の考えについてスピーチをしたり、それを聞いて、同意したり、質問したり、論拠を示して反論したりする活動」、「話合いの目的に応じて結論を得たり、多様な考えを引き出したりするための議論や討論を、他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動」などについて国語科で学習し、外国語科でのスピーチやディベート、ディスカッションなどの活動に生かすなど、同じ種類の言語活動を通して指導することが考えられる。また、日本語と英語の語彙や表現だけではなく、高等学校の外国語科において身に付けるべき資質・能力である「思考力、判断力、表現力等」を、「論理的に適切な英語で表現すること」を通して育成する観点から、論理の展開の仕方における両言語の違いや共通点にも目を向けながら英語指導に当たることも、言語的感性を養うことを助け、英語使用に際しての気付きを促す上で有効である。この点は、特に外国語による発信能力の育成を強化する科目群である「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」において、英語で話す・書く際の論理の構成や展開の方法を指導する際に留意する必要がある。しかし、その場合、日本語と英語の共通する点や異なる点を、単なる知識として学習するものではないことに留意する必要がある。このように、国語科及び外国語科の連携を図りながら、コミュニケーションを図る資質・能力が自然にかつ効果的に培われるようにすることが重要である。

# 【参考】現行の学習指導要領における「文化」等に関する主な記載（高等学校①）

## 【本文】

### 内容 [教材選定の観点]

- (2) 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点に配慮すること。
- (ア) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。
- (イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。
- (ウ) 社会がグローバル化する中で、広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。
- (エ) 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

## 【解説】

**教材選定の観点（2）** 「日常生活、風俗習慣」とは、家庭や学校、社会における日常生活や風俗習慣などを示している。学年が進むにつれて、これらのことについての人々の考え方などを含めて取り扱うことにする。英語の学習を通して、人々の生活や風俗習慣の相違に一層の関心をもたせ、文化の多様性に着目させることが必要である。(略)「伝統文化」とは、昔から伝えられてきた風習・制度・思想・技術・芸術などを示している。国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、日本はもちろんのこと外国の伝統文化について知ることは、幅広い国際的な視野を身に付ける観点から大切なことである。また同時に、国際社会の中であって日本人であることの自覚を高めつつ、文化や価値の多様性に気付かせながら、自国の伝統文化について外国の人々に発信できる素養を培うことも必要であり、そのための適切な題材を選択することが求められる。

(ア) 公正な判断力や豊かな心情を身に付ける上で、様々な価値観に接することのできる適切な題材を選択することが必要であることを示したものである。広く他の国で起こっている出来事や人々の考え方などを知ることにより公正かつ客観的な判断力を養うとともに、豊かな人間性を育てることにもなる。題材については、英語を使用している人々をはじめ世界の様々な人々の多様な考え方や行動の仕方について知ることができるものを選択することはもちろん、現在世界で起こっている出来事や話題、それに対する人々の様々な意見を通して、物事の見方は一つではなく多様な観点から価値判断ができるという点への気付きを促し、それに基づいて自身の意見を構築し、ひいては具体的な行動につなげていくことのできるようなものを選択することが大切である。

(イ) 英語の学習を通して、我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知ることになるとともに、そうしたことに関心を持ち、理解を深めようとする態度を育成することが大切である。複数の文化に触れることが、我が国の伝統文化についての理解を深め、文化の多様性に対してより寛容になることに資するとともに、英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにもつながっていくことが考えられる。そのような観点から適切な題材を選択することが必要であることを示したものである。ここで言う「文化」とは、日本語や英語を用いる人々の日常生活に密着した衣食住に関わる生活文化をはじめ、その生活文化を取り巻く社会や国民性、学問（人文科学・社会科学・自然科学）、科学技術や芸術に至るまで幅広い分野にわたる文化のことである。この場合、生徒の発達の段階にふさわしいものの中から、生徒の興味・関心を踏まえ、特定のものに偏ることなく、文化に対する関心や理解を高め、公正な判断を行うのに役立つ題材を取り上げる必要がある。

(ウ) 平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることを想定し、その能力の向上を課題として掲げている。そこで、外国の文化や考え方などについて受け身的に学ぶだけではなく、日本の文化や日本人の考え方を積極的にまた客観的に世界へ発信するという観点からふさわしい題材の選択が必要になってくる。題材の選択に当たっては、日本や世界の各地で起こっていることや話題になっていることについて多面的に考え、広い視野から判断し、生徒個人として、また我が国に暮らす一員として、どのような意見や解決策を持ち、行動に移していくのかまで考慮する必要がある。国際理解を深め、国際協調の精神を養うのに役立つもので、生徒の興味・関心を引き出し行動につなげていけるような適切なものを選択することが大切である。その際、文化の多様性や価値の多様性に気付かせ、多様な背景や価値観を持った人々を理解し、共生していこうとする態度を育てるという観点が必要である。さらに、世界の国々の相互依存関係を正しく認識させるなど、生徒が世界の中の日本人であることの自覚を高めるとともに、平和な共生社会を築いていくための国際協調の精神を養うように配慮することが大切である。

(エ) 題材については、広く人間、社会、自然などについて取り上げる。その際、それらについて生徒が十分学びを深めていくことができるよう、例えば、教科等間における学びのつながりや広がりがあるか、身の回りのことから社会や世界との関わりを捉えることができるか、生徒が発信したいと思えるような題材であるかなどの視点が必要である。

# 【参考】現行の学習指導要領の総則における「海外から帰国した生徒や外国人の生徒の指導」の記載

## 【本文】

### 第4 生徒の発達の支援

#### 2 特別な配慮を必要とする生徒への指導

##### (2) 海外から帰国した生徒などの学校生活への適応や、日本語の習得に困難のある生徒に対する日本語指導

ア 海外から帰国した生徒などについては、学校生活への適応を図るとともに、外国における生活経験を生かすなどの適切な指導を行うものとする。

イ 日本語の習得に困難のある生徒については、個々の生徒の実態に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。特に、通級による日本語指導については、教師間の連携に努め、指導についての計画を個別に作成することなどにより、効果的な指導に努めるものとする。

## 【解説】

### ① 学校生活への適応等（第1章第4の2の（2）のイ）

国際化の進展に伴い、学校では帰国生徒や外国人生徒に加え、両親のいずれかが外国籍であるなどのいわゆる外国につながる生徒の受入れが多くなっている。これらの生徒の多くは、異文化における生活経験等を通して、我が国の社会とは異なる言語や生活習慣、行動様式を身に付けているが、一人一人の実態は、それぞれの言語的・文化的背景、年齢、就学形態や教育内容・方法、さらには家庭の教育方針などによって様々である。このため、これらの生徒の受入れに当たっては、一人一人の実態を的確に把握し、当該生徒が自信や誇りをもって学校生活において自己実現を図ることができるように配慮することが大切である。

帰国生徒や外国人生徒、外国につながる生徒は、他の生徒が経験していない異文化での貴重な生活経験をもっている。外国での生活や異文化に触れた経験や、これらを通じて身に付けた見方や考え方、感情や情緒、外国語の能力などの特性を、本人の各教科等の学習に生かすことができるよう配慮することが大切である。また、本人に対するきめ細かな指導とともに、他の生徒についても、帰国生徒や外国人生徒、外国につながる生徒と共に学ぶことを通じて、互いの長所や特性を認め、広い視野をもって異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢を育てるよう配慮することが大切である。そして、このような相互啓発を通じて、互いに尊重し合う態度を育て、国際理解を深めるとともに、国際社会に生きる人間として望ましい能力や態度を育成することが期待される。このような機会としては、外国語科において、外国語でコミュニケーションを行ったり、外国語の背景にある生活や文化などについて理解を深める学習活動を進めたりする際に配慮を行うことなどが考えられるほか、例えば社会科や音楽科などの教科や道徳科、総合的な学習の時間での学習活動、特別活動における学校行事などが考えられ、生徒や学校の実態等に応じて適宜工夫することが必要である。

### ② 日本語の習得に困難のある生徒への通級による指導（第1章第4の2の（2）のイ）

帰国生徒や外国人生徒、外国につながる生徒の中には、日本語の能力が不十分であったり、日常的な会話はできていても学習に必要な日本語の能力が十分ではなく、学習活動への参加に支障が生じたりする場合がある。このため、生徒が日本語を用いて学校生活を営むとともに、学習に取り組むことができるよう、一人一人の日本語の能力を的確に把握しつつ各教科等や日本語の指導の目標を明確に示し、きめ細かな指導を行うことが大切である。また、このような考え方は学習状況の評価に当たって生徒一人一人の状況をきめ細かに見取っていく際にも参考となる。

（略）生徒が在籍し、大半の時間を過ごすことになる通常の学級における指導に当たっては、一人一人の生徒の日本語の能力などに応じ、①授業において使われている日本語や学習内容を認識できるようにするための支援、②学習したことを構造化して理解・定着できるようにするための支援、③理解したことを適切に表現できるようにするための支援、④自ら学習を自律的に行うことができるようになるための支援、⑤学習や生活に必要な心理的安定のための情意面の支援といった側面からの支援が求められる。このため、通常の学級の担当教師には、例えば、ゆっくりはっきり話す、生徒の日本語による発話を促すなどの配慮、絵や図などの視覚的支援の活用、学習目的や流れが分かるワークシートの活用などの教材の工夫、生徒の日本語習得状況や学習理解度の把握に基づいた指導計画の作成など、生徒の状況に応じた支援を行うことが考えられる。

（略）さらに、通常の学級における指導、通級による日本語指導のいずれの場合においても、言葉の問題とともに生活習慣の違いなどによる生徒の不適応の問題が生じる場合もあるので、教師自身が当該生徒の言語的・文化的背景に関心を持ち、理解しようとする姿勢を保ち、温かい対応を図るとともに、当該生徒を取り巻く人間関係を好ましいものにするよう学級経営等において配慮する必要がある。また、外国人生徒や外国につながる生徒については、課外において当該国の言語や文化の学習の機会を設けることなどにも配慮することが大切である。

これらの日本語の習得に困難のある生徒の指導を効果的に行うためには、生徒の在籍する通常の学級の教師、通級による日本語指導を担当する教師や学校管理職など、全ての教職員が協力しながら、学校全体で取り組む体制を構築することが重要である。また、日本語教育や母語によるコミュニケーションなどの専門性を有する学校外の専門人材の参加・協力を得ることも大切である。（略）



# 参考資料・データ

# 「高次の資質・能力」等を活かした単元計画づくりの参考イメージ（中学校・理科）

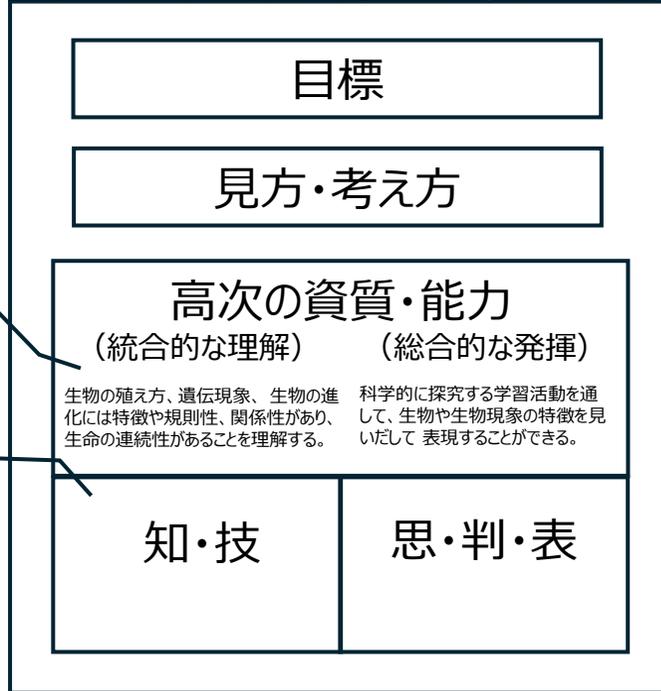


次は3年生の生物分野「遺伝の規則性と遺伝子」か。教科書をなぞるだけでは、子供達も学習内容を深く理解できないだろうし、資質・能力も身につけにくいだろうな。そもそもこの学習内容は本質的にどうい資質・能力を育てたいんだっけ？



まず、学習指導要領の記述を確認してみよう。

## デジタル学習指導要領（イメージ）



学習を終えた後に目指したい学習の深まりの姿を確認できる。

他教科や前後の学習内容も確認できる。デジタル学習指導要領では解説の記述や評価規準例も見られる。



なるほど、生徒が最終的に「高次の資質・能力」を身に付けられるように、学習内容を組み立てるのか。科学的な探究の活動を通じて、遺伝の規則性や生命の連続性を理解できるようにしたい。デジタル学習指導要領では、学習指導要領解説の記述も確認できるからヒントになるし、前後の学習内容なども確認しておけば取り残される生徒も減りそうだ。



教科書の見開き2ページを毎コマ積み重ねるだけでは「科学的な探究」の活動にならないし、深い理解にも繋がらないから、うまくポイントを重点化して単元を組まないといけない。育成したい「高次の資質・能力」や前後の学習内容や教科書の該当ページなどを踏まえて、この単元に充てられる授業時数は何時間になるだろうか。...



「遺伝の仕組み」と「遺伝のモデル実験」の学習内容に重点を置き、それぞれ2時間を充てよう。規則性・生命の連続性に関する学びの本質がつかみやすいように、単元の最初と最後に、ガイダンスと振り返り時間を設定しよう。

科学的に探究する時間を確保したいし、「遺伝の仕組み」では、科学史としての「メンデルの交配実験」の扱いは軽くしよう。

特に、遺伝の仕組みの本質的な理解を促すために、4、5時に、「遺伝のモデル実験」を設定しよう。

第4時の実験では、「各自の実験結果の考察」を重点として、  
 第5時の実験では、「実験値と理論値を比較して考える新たな実験計画の立案」を重点として、実施しよう。

ここまでで「遺伝の仕組み」が理解できるので、最後に、遺伝を担うものを理解するために、「遺伝子の本体」について、1時間指導しよう。

これで、本単元での学習内容の順番が決まった。  
 これらから、本単元に充てる授業時数は合計で7時間になるな。



学習内容や学習の順番が決まったので、評価計画を立てるか。身につけさせたい資質・能力をきちんと見とれる評価にしたいな。



知・技も、規則性・生命の連続性に関する本質的な理解をペーパーテストで見取るのは難しそうだな。今回は、実験記録の記述分析で見取ってみようか。

特に思・判・表は、科学的な探究の過程で身につけた資質・能力を総合的に発揮して表現するようなパフォーマンス課題を設けたらよさそう。

デジタル学習指導要領を使えば、評価規準例も一括で見られるのが便利だな！

## 単元計画書のイメージ

### 1. 単元名：遺伝の規則性と遺伝子

学習指導要領の記述を転記する。

### 2. 教科の見方・考え方

自然の事物・現象・・・を、●●●の視点から捉え、◆◆◆すること。

### 3. 分野・区分の高次の資質・能力

学習指導要領の記述を転記する。

統合的な理解	総合的な発揮
生物の殖え方、遺伝現象、生物の進化には特徴や規則性、関係性があり、・・・	科学的に探究する学習活動を通して、生物や生物現象の特徴を見いだして・・・

学習指導要領の記述や生徒の実態を踏まえて設定する。  
【検討①】

### 4. 単元の目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性
生命の連続性に関する事物・現象に着目しながら、遺伝の規則性と遺伝子を理解するとともに、・・・	遺伝の規則性と遺伝子について、観察、実験などを行い、その結果や資料を分析して解し、・・・	遺伝の規則性と遺伝子に関する事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度を・・・

単元の目標を基に、評価の観点の趣旨を踏まえて設定する。  
【検討②】

### 5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
遺伝の規則性と遺伝子に関する事物・現象の特徴に着目しながら、遺伝の規則性と遺伝子についての基本的な概念や原理・法則などを理解しているとともに、・・・	遺伝の規則性と遺伝子について、観察、実験などを行い、その結果や資料を分析して解釈し、遺伝現象についての特徴や規則性を見いだして表現しているとともに、・・・	※「○」のつけ方など、具体的な評価の在り方については今後検討予定

## 6. 指導と評価の計画

授業内容、評価場面と評価方法を計画する。【検討③】

時間	学習活動	重点	記録	備考
1	●単元のガイダンス ●既習事項や既存の知識のイメージマップでの整理	態		※ガイダンスでは、 ・学習の流れと学習方法 ・前後の学習内容とのつながりを指導する。 ※イメージマップでの整理は7時間目に自己の変容に気付かせるために行う。
2 3	●遺伝の仕組み ・メンデルの交配実験 ・有性生殖と顕性の法則 ・減数分裂と分離の法則	知		※遺伝の法則については、生命現象と関連付けて理解させる。
4 5	●遺伝のモデル実験 ・実験操作の意味 ・実験結果の考察	知 思	○ ○	※観点別学習評価は、 ・操作の意味を理解しているか ・実験結果と理論値を比較して結果の妥当性や改善方法を考察しているかを記述分析で評価する。
6	●遺伝子の本体 ・染色体、DNA、遺伝子の関係	知		
7	●学習の振り返り ・学習内容のイメージマップでの再整理  ●パフォーマンス課題	態  知 思	○  ○	※観点別学習評価は ・学習前後の自己の変容を基に、次単元での学習にどのように生かそうとしているかを記述分析で評価する。 ※高次の資質・能力を踏まえたパフォーマンス課題で、資質・能力の深まりを確認する。

## 7. パフォーマンス課題

高次の資質・能力を踏まえて作成する。  
【検討④】

「2色のトウモロコシの種子の色の遺伝」について、その仕組みを説明しなさい。



このように、学習指導要領を基にして作成することができるんだね。

# (参考) 「話すための思考」から見た外国語学習の意義

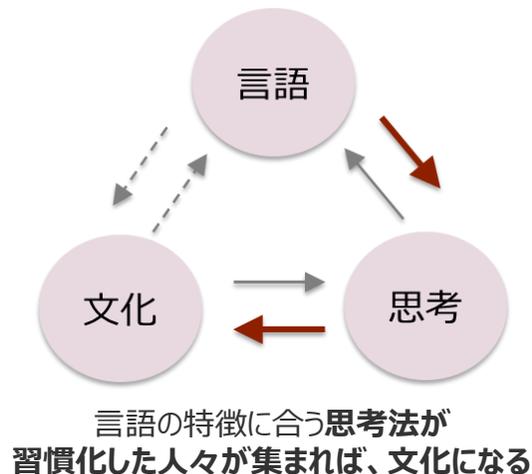
## 「話すための思考」から見た外国語学習の意義

- 同じ状況を表す異なった言語の表現形式を比較することを通して、両言語話者の持つものの見方や世界の捉え方の違いを理解することができる。外国語学習の意義とは、**母語とは異なる新たな思考法（新たなものの見方、新たな世界の捉え方）があることを知り、複眼的に世界を見る知力を養うこと。**
- どんなにAI翻訳によって言語のコミュニケーション機能が代替されたとしても、消えずに残される外国語学習の意義がまさにここにある。
- **外国語を学ぶということは、ことばの奥深さに触れることに直結する。**仮にAI翻訳にコミュニケーションを任せる時代が到来したとしても、ことばの奥深さを意識するチャンスは失ってはならない。それが、**巡り巡って他者を知り自分を知ることになる。**

### (参考) Slobin(1996)の「話すための思考」(Thinking for speaking)

※言語、思考、文化を分かりやすさの観点から単純化して示している点に留意。

文化から思考へ、思考から言語へ、という一連の意識の流れだけでなく、言語から思考へ、思考から文化へという流れも存在している。



話す言語によって、話す内容のどこに注意を払うか（思考）が異なる

(参考) 選択的注意：環境の中に埋め込まれた情報を能動的に取りに行く

(例)



英語：対象物が可算・不可算か、単数・複数か  
→ a cow / cows

日本語：対象物が動物か否か  
→ 牛がいる ⇔ 木がある

言語を使うほど、思考法が習慣化され、  
言語を話していないときでも人間は無意識にその思考を行うようになる

# (参考) 日本語と英語の「視点」の違い

※以下は一例であり、必ずしも当てはまるものではなく、二項対立的に捉えるべきではない点に留意。

日本語話者は、自身に関わる出来事を**事態内視点**で捉え、  
英語話者は自己を客体視することによって**事態外視点**で捉える傾向がある

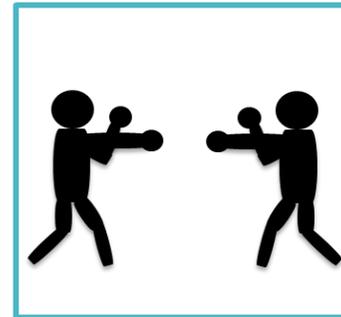
## 事態把握の様式



### 事態内視点

事態の中にある自分視点で、事態を見ている様式

a



### 事態外視点

自分が関わる事態を、事態の外から見ている様式

b

例1

国境の長いトンネルを抜けると  
雪国であった。

The train came out of the long  
tunnel into the snow country.

川端康成の「雪国」の冒頭部分とその英訳。  
描いている情景は同じだが、日本語と英語とで視点の  
取り方が異なっている。

例2

その髪型いいね。  
Your haircut is nice.

私その髪型好き。  
I like your haircut.

日本語話者は「事態内視点」でaのように、  
英語話者はbのように言う傾向がある。

例3

The lecture is boring.  
この講義は退屈です。

I find the lecture boring.  
私はこの講義が退屈だと感じます。

英語ではabともに見られる表現。  
aは自然な日本語であるのに対し、事態外視点をとって  
いるbは日本語として違和感がある。

# (参考) 可視的文化と不可視的文化、日本語文化と英語文化

※以下は一例であり、必ずしも当てはまるものではなく、二項対立的に捉えるべきではない点に留意。

他言語話者が持っている不可視的文化を理解することは、  
無自覚のうち持っている自己の不可視的文化に自覚的（メタ認知）になる

## 可視的文化と不可視的文化

- **可視的文化 (Visible Culture)**  
言語学習なしでも理解可能な、翻訳を通して理解できる文化の側面  
(例) クリスマスの慣習、靴を履いたまま家の中で過ごす慣習
- **不可視的文化 (Invisible Culture)**  
言語学習を通してはじめて理解が可能な、自然な翻訳（直訳）を通すと理解できなくなってしまう文化  
(例) 黄色い線の内側でお待ちください → Please wait behind the yellow line.
  - **隠れた文化 (Covert Culture)**  
暗黙の了解として共同体で共有されている部外者には認識されにくい文化  
(例) John takes a shower everyday → 朝にシャワーを浴びる習慣

## 日本語文化の特徴

- **比較的容易に他者を自己に同期、同化**  
事態内視点をとる傾向にある日本文化では、他者の視点を自己の視点に同期または同化させる傾向がある  
(参考：察しの文化)  
他者も自分と同じように感じ、同じように考えているはずだという前提
- **対象に共感できるか否かに敏感**  
(例) 子犬を抱く ⇔ 大きな魚を抱える  
※生物か否か、有情か否かは、対象に共感できるかどうかを決める重要な要素

## 英語文化の特徴

- **他者は自分とは異なるということが暗黙の前提**  
くどいようでも、相手に何を指しているのかを明示  
(例) 英語では代名詞を使用
- **対象への共感や生物か否かは英語において日本語のように意識されない**  
(例) Hold a puppy/ a big fish.

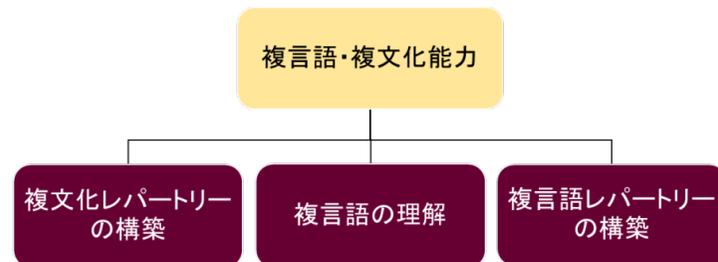
# (参考) CEFR-CVにおける複言語・複文化能力についての言語能力記述文 (Can do)

- 2001年、欧州議会が言語教育の質的な改善と柔軟な (open-minded) 複言語的市民の育成等を目的として、**CEFR※1を開発。言語を使用して何が出来るかをレベル別の言語能力記述文 (Can do) で示した。**
  - ※1 Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment : 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠
- 学習者・教授する者・評価者がCEFRを共有することによって、**言語熟達度を同一基準で判断しながら「学び、教え、評価」できるような意図**されているとともに、Can doの学習目標を実世界での言語使用と関連付けることで、**行動中心アプローチによる学習枠組みを提供。**
- 2020年には「ヨーロッパ言語共通参照枠 随伴版」(**CEFR-CV※2**) の**確定版を公表し、CEFRレベルに対応する複言語・複文化能力についてのCan doも示した。**CEFR-CVで示す複言語・複文化能力についての説明やCan doについては、**FREPAを参照することを推奨している。**
  - ※2 Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment Companion Volume

- 複言語・複文化能力を構成している「**複文化レパートリーの構築**」には、例えば以下のような概念が含まれている。

- ・ 文化の多様性に接した時、その曖昧さに対する対応 (振る舞いの調整、表現の修正等) 。
- ・ 異なる文化の慣習や規範への理解、ある行動について文化を異にする人々は、異なった受け取り方をするかもしれないということを理解する必要があるということ。
- ・ ジェスチャー、声の調子、態度などの立ち振る舞いの違いを理解し、過度の一般化とステレオタイプについて話し合うことが必要であるということ。
- ・ 違いを受け止め、共通点を見出し、コミュニケーションの改善に利用すること。
- ・ 違いに敏感 (繊細) であることを示す意欲を持つこと。
- ・ 誤解が生じる可能性があることを予測し、説明を申し出たり求めたりするための心構え。

## 複言語・複文化能力の構成



(出典) Council of Europe(2020) Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment – Companion volume Council of Europe Publishing Strasbourg available at [www.coe.int/lang-cefr](http://www.coe.int/lang-cefr).

欧州評議会(2020)『言語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 随伴版』

令和6年2月22日 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 (第124回) 資料2 「日本語教育の参照枠」の見直しのために検討すべき課題について」を基に作成。

※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している

# (参考) CEFR-CVにおける「複文化レパトリーの構築」のCan do

C2

- ・コンテキストに合わせて自分の行動を開始したり、言葉遣いをコントロールしたりすることができ、文化的な差異に対する気づきがあることを示し、微妙な修正を行ない、誤解や文化的突発事故を避けることができる。

C1

- ・社会言語的/社会語用論的側面での慣習の違いを認識し、それを批判的に省察し、自分の言葉遣いを修正できる。
- ・異文化の出会い、読み物、映画などを引き合いに出して、注意深く文化的価値観や実践行動の慣習の背景を説明したり、解釈したり議論したりできる。
- ・異文化間コミュニケーションで起こる曖昧さと取り組み、相手の反応を建設的に説明し、また文化的に適切に表現し、解明ができる。

B2

- ・\*\*自分自身と他の社会グループの物の見方と実践行動を、判断と偏見を左右することの多い暗黙の価値観に気付いていることを示しながら、記述・評価ができる。
- ・\*\*自分のコミュニティがもっている、そして自分にとって馴染みのある他のコミュニティがもっている、文化的な前提、先入観、ステレオタイプ、偏見に対する解釈を説明することができる。
- ・\*\*他の文化からの文書や出来事の解釈・説明ができ、それを自分自身の文化、または自分が馴染みの文書や出来事との関係づけることができる。
- ・\*\*自分のコミュニティおよび他のコミュニティの、メディアの中の情報や意見の客観性や釣り合いについて、議論できる。文化的に規定されている行動パターンの類似性と相違（例：ジェスチャーと話し声の大きさや、手話の場合は手話表現の大きさ）を把握し、その意味を議論し相互理解に持っていける。
- ・異文化間の出会いで、通常は人が一定の状況で当然と受け取っていることが必ずしも他と共有されているわけではないことを認識でき、適切に対応したり自分の考えを表明したりできる。
- ・一般には文化的特徴を当該文化の中で適切に解釈できる。
- ・自文化や他文化で特有のコミュニケーションのやり方や、それが引き起こし得る誤解を省察し、説明ができる。

B1

- ・姿勢やアイコンタクト、他人との距離に関する慣習に従った行動が大抵の場合とれる。
- ・ごく一般に使われている文化的特徴が大抵の場合適切に対応できる。自分の文化の特徴を他の文化の人たちに説明できるだけでなく、他の文化の特徴を自分の文化の人たちに説明できる。
- ・簡単な専門用語を使って、自分たちの価値観や行動が、他の人たちの価値観と行動に対する見方に影響を与えることを説明できる。
- ・簡単な専門用語を使って、他の社会文化のコンテキストの中では自分自身には「変だ」思われることが、当該の社会文化のコンテキストでは「普通」になる経験を議論できる。
- ・簡単な用語を使って、自分自身の文化的に規定された行動が、他の文化の人々には違った受け取り方をされる経験を議論できる。

A2

- ・日常的やり取りと結びついた文化的な基本慣習（例：挨拶の仕方の相違、儀礼）を認識し、それに従える。日常的な挨拶、お別れが言え、感謝とお詫びも適切に言えるが、ルーティンから外れたところでは難しい。
- ・日常の取引で自分の行動が望んだとは異なるメッセージとして伝わるかも知れないと認識し、それを簡単に説明しようと試みることができる。
- ・他の文化の人とのやり取りで問題が生じることを認識することはできるが、その状況の対応の仕方はよく分からない。

A1

- ・数え方、距離の測り方、時間の表し方などに、いろいろな方法があることを認識できるが、ただ、日常の具体的な交渉や取引でそれを援用するには困難が見られる。

Pre-A1

利用できる能力記述文はない。

「\*\*」がついている能力記述文はB2レベルにとっても高度なものであり、Cレベルにも適しているかも知れない。

(出典) 欧州評議会(2020)『言語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 随伴版』を基に作成。

# (参考) FREPA (言語と文化への多元的アプローチのための参照枠)

- 2004年以降、欧州評議会の欧州現代語センター (European Centre for Modern Languages (ECML)) は、複言語・複文化教育を推進することを目的として、**FREPA**<sup>※1</sup> を開発し、2012年に「A Framework of Reference for Pluralistic Approaches to Languages and Cultures」を公表。

※1 Framework of Reference for Pluralistic Approaches to Languages and Cultures : 言語と文化への多元的アプローチのための参照枠

- FREPAは、**複数の言語・文化を関連付けて扱う「多元的アプローチ (pluralistic approaches) 」を重視し、学習者が身につけるべき「能力」と「リソース」を示した。**

## 能力 (Competences)

実際のコミュニケーションや学習の場面 (状況) において、複数の内的・外的リソースを動員して課題を遂行する複雑な力。主に以下の2つの領域に大別される。

- **C1 : 他者性の文脈における言語的・文化的コミュニケーションを管理する能力** (紛争解決、交渉、仲介、適応など)
- **C2 : 複数の言語・文化的レパートリーを構築・拡張する能力** (経験の活用、体系的な学習の適用など)

## リソース (Resources)

能力を支える内的な資源。

**言語能力のレベルとは無関係に、以下の3領域別に能力記述文 (Can-do) を示した。**

- **知識 (Knowledge/Savoirs)**: 言語と社会、言語的及び非言語的コミュニケーション、文化の多様性に関する知識など
- **態度 (Attitudes/Savoir-être)**: 言語・文化・言語と文化の多様性に対する関心・意欲、相対化、学びに向かう態度など
- **技能 (Skills/Savoir-faire)**: 観察・分析、特定、比較、言語間の転移、やり取り、学習の仕方の技能など

※Byram(1997, 2021)の異文化間コミュニケーション能力 (ICC) についてはP.43参照

- また、FREPAはカリキュラムの開発者、教材作成者、教師等を対象に以下のツールを提供している。
  - 言語と文化への多元的アプローチのための参照枠 : 体系化・階層化された能力とリソースのリスト
  - オンライン教材データベース: 多元的アプローチを教室で実践するための活動案
  - トレーニングキット: 教師が自律的に多元的アプローチを学ぶための研修用モジュール

## (参考) FREPAにおける能力記述文の例 【態度】

A-2	他の言語／文化／人間の存在に対する気づき、あるいは言語的／文化的／人間の多様性に対する気づき。
A-2.1	自分の言語や文化、および他の言語や文化に対する気づき。
A-2.2	言語的／文化的差異に対する気づき。
A-2.2.1	言語や文化によって異なりうる、言語や文化のさまざまな側面に気づいている
A-2.2.1.1	言語的な世界（例えば、言語音、文字、統語組織など）や文化的な世界（例えば、テーブルマナーや交通規則など）の多様性に気づいている
A-2.2.2	同一の言語（方言なども含む）や文化の変異形（局所的な変異形、地域的な変異形、社会的な変異形、世代的な変異形）に気づいている
A-2.2.3	言語や文化の中にみられる他者性の痕跡（例えば日本語の中の借用語）に気づいている
A-2.3	言語的／文化的な類似性に対する気づき。
A-2.4	異なる言語／文化の間にある差異および類似性に敏感である
A-2.4.1	あいさつの仕方、コミュニケーションを始める方法、時間の表現方法、食事の仕方、遊び方といったことに、大きな多様性があることに気づいているまた、「それと同時に」、それらの様式が応える普遍的なニーズには類似性があることに気づいている
A-2.5	周囲の、あるいは離れた場所の複言語的／複文化的な状況に対する気づき。
A-2.5.1	社会の言語的／文化的多様性に気づいている
A-2.5.2	教室の言語的／文化的多様性に気づいている
A-2.5.2.1	教室内にみられる諸言語／諸文化の多様性に気づいている（それらの言語／文化が自分の言語的／文化的な実践／知識と併存している場合）。
A-2.6	言語的／文化的な慣習の相対性に対する気づき。

# (参考) 異文化間コミュニケーション能力に関する研究上の知見

- Byram(1997, 2021)は、**異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence (ICC))** を言語能力だけでなく、異なる文化的背景をもつ人々とコミュニケーションを行いながら、文化的な意味を解釈し、関連付け、異なる文化の間を仲介する複合的な能力として捉え、ICCの**モデルを提示**。
- 従来のコミュニケーション能力のモデルは対象言語のネイティブ・スピーカー（母語話者）を理想としていることを問題視し、「**異文化間話者 (Intercultural Speaker)**」を理想として掲げた。

## 異文化間コミュニケーション能力

### 言語能力

話し言葉、書き言葉を産出し、解釈するために、その言語の標準変種のルールに関する知識を適用する能力

### 社会言語能力

一人の対話相手が産出した言語に対して、対話相手が当然としている意味づけ、あるいは対話相手との交渉によって明らかとなる意味を付与する能力

### 談話能力

対話相手の文化の慣習に従った、あるいは特定の目的のための異文化間テキストとして交渉の対象となる独和型ないし対話型テキストを産出し、解釈するための方略を使い、発見し、交渉する能力

## 異文化間能力

### 解釈／関連づけのスキル (savoir comprendre)

他文化の文書や出来事を解釈・説明し、自国の文書や出来事にそれらに関連づける能力

### 知識 (savoir)

- 社会集団と、自国と対話相手の出身国における社会集団の産物と習慣に関する特定の知識
- 社会的及び個人間の相互交流の過程に関する一般的知識

### クリティカルな文化意識 (savoir s'engager)

自己の文化や国、他の文化や国に見られる価値観を、クリティカルにかつ明確で体系的な推論の過程に基づいて評価する能力

### 好奇心/開放性を持つ態度 (savoir être)

好奇心、開放性、他の文化についての疑念と自己の文化についての信念を保留する心構えがあること

### 発見／相互交流のスキル (savoir apprendre-faire)

文化的習慣についての新しい知識を習得する能力、リアルタイムでコミュニケーションと相互交流を行うという制約のもとで、知識、態度、スキルをうまく操作する能力

(出典) Byram M. (1997). Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Multilingual Matters.  
Byram M. (2021). Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence Revisited. Multilingual Matters.  
バイラム・マイケル (2026) 「異文化間コミュニケーション能力 —その指導と評価—(再考)」(松本佳穂子監訳;山田悦子訳). 開拓社.  
※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している

# (参考) 異文化間能力に関する研究上の知見

- Butler & Jiang (2025) は、異文化間能力 (Intercultural Competence) を早期から育成することの重要性は長く認識されてきた一方で、**子供※の発達段階に即した教育の重要性を指摘**。  
※外国語 (Foreign Language) または第二 (追加) 言語 (Additional Language) を学ぶ若年言語学習者 (young language learners (YLLs) )
- Read (2022) の「Three-phase model」のように従来の大人向けモデルを子供 (4~12歳) 向けに再構築する取り組み等も進んでいるが、子供の異文化間能力を育むためには**理論的・概念的な定義の不足、教師の専門的研修の不足や言語の壁、発達段階や実態に応じた教材の不足等の課題があり、今後さらなる研究が必要であるとした**。

## Three-phase model

※Byramの異文化間コミュニケーション能力 (ICC) モデルを基礎としつつ、子供の年齢に応じた認知的、概念的、心理的、社会的および情緒的発達を反映するように設計。  
※必ずしも外国語・第二言語の教育における異文化間教育を念頭においているものではなく、一般的なモデルである可能性に留意。

### ●第1段階：本物の子供の文化 (Authentic Children's Cultures)

**対象:** 主に幼児～小学校低学年

**目的:** 他の文化圏の子供たちも自分たちと同じような活動を楽しんでいることを理解することで、**肯定的な自己イメージと自信を育むことを目指す**。

**内容:** 遊びを中心とした活動。学習者が母語や身近な言語で既に親しんでいる、韻 (ライム)、歌、絵本、物語、ゲーム等を外国語で体験。

### ●第2段階：文化の比較と対比 (Comparing and Contrasting Cultures)

**対象:** 主に小学校中学年

**目的:** 文化間の比較・対比を行い、クラスメートの文化を含む**多様な文化を尊重する姿勢を養う**。

**内容:** 自己の文化的なアイデンティティや共感能力が発達し始める時期に合わせて、絵本やプロジェクト型の活動を実施。家族、移民、友情といった社会的・文化的話題について考え、クリティカル・シンキングを養う。

※その際、文化に対する固定観念 (ステレオタイプ) や過度な一般化を避けるような教材や活動が重要。

### ●第3段階：より広い世界の文化 (Cultures in the Wider World)

**対象:** 主に小学校高学年

**目的:** **自分自身の見方を相対化しながら、多様な視点や信念を理解し、尊重できるようになることを目指す**。

**内容:** 育まれたコミュニケーション能力やデジタル技術を活用し、探究学習やオンラインによる国際交流等を通して異文化の文脈でやり取りできる力を養う。

(出典) 以下の文献を参考に文部科学省作成。 ※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している

Butler Y. G. & Jiang S. (2025). Intercultural learning in preschool and primary school contexts. In C. Fäcke X. Gao & P. Garrett-Rucks (Eds.) Handbook of plurilingual and intercultural language learning (pp. 275-287). John Wiley & Sons.

Read C. (2022). Creating a model for intercultural competence in early years and primary ELT. In D. Valente & D. Xerri (Eds.) Innovative practices in early English language education (pp. 57-79). Palgrave Macmillan.